

日本産学フォーラム 第13回リベラルアーツ企業研修会
(2020年8月17日 オンライン開催)

藤山座長：こんばんは。ご参集いただきましてありがとうございます。日本産学フォーラムのリベラルアーツ企業研修会の第13回を行いたいと思います。

実は、この講座を最初につくるときに、現代のグローバリズムっていうのは市場原理と民主主義と科学技術だになっていうことで、その3回、過去、現在、未来の9回のものに前後を付けてやろうという案を出して、この産学フォーラムの親委員会のほうに、こういうのでいかがでしょうって出したときに、実はある方が手を挙げられて、これ、宗教がないじゃないの？と。リベラルアーツで宗教がないっていうのは、やっぱりまずいんじゃないの？っていう指摘があって。これはずっと私もそこところを考えていたところなんですけども、このテーマはなかなか難しくて、どういう切り口から話していただくかっていうの、随分、迷いました。

一つは、順番に言うと、宗教と経済みたいな話だとか、経済思想だと、有名な『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』っていうマックス・ヴェーバーがあるわけで、そういう関係みたいなことっていうのも一つ題材になり得るし、あるいは、リン・ホワイトっていう人が書いている『機械と神』っていうテキストがあるんですが、これは、キリスト教が科学というものをつくるのに対して、その母体の役割を果たしたっていう、当時はあんまり通説じゃなかったことを言われて、最近かなり通説になってると思いますけども、そういう関係もあるんですが。やっぱり何ととっても政治との関係っていうのは主になるのかなという、民主主義と、あるいは宗教の関係っていうのを一つ思い付いたわけですね。その他には、例えばイスラムの問題なんかをもっと大きく捉えて考えると、そういうこともあったんですが。

きょうは特にフランスにおけるライシテの問題に大変業績のおありになる、東京大学の伊達聖伸先生をお招きをして、『宗教との共生のために』っていうタイトルでお話を頂きたいと思います。課題図書は『ライシテから読む現代フランスー政治と宗教のいま』というのを挙げていただきました。

先生は、1999年の4月から2005年の9月まで東京大学の人文社会科学研究科の基礎研究専攻ということでいらっしゃいまして、また、2003年の10月から2007年の11月にリール第三大学他で大学院にいらっしゃってます。ご経歴として、その後、2007年の4月からは日本学術振興会の研究員であるとか、2009年の4月からは東北福祉大学の講師であるとか、2011年の4月から2019年の3月までは上智大学の准教授をおやりになって、現在、東京大学の大学院総合文化研究科、地域文化研究専攻の准教授でいらっしゃいます。

それでは、伊達先生、よろしく願いいたします。恐らく70分前後お話を頂いて、80分でも構いませんが、その後、皆さんとの意見交換をお願いしたいと思います。先生、よろし

くお願いします。

伊達先生：藤山座長、どうもご紹介ありがとうございました。皆さん、こんばんは。伊達と申します。きょうはよろしく申し上げます。パワーポイントを準備してきたので、一応、そちらを提示させていただきます。

藤山座長と小原事務局長は、私、2019年からこの場にいるんですけれども、その研究室へ訪ねてきてくださったときのこと覚えてますが、今のお話にあったように、リベラルアーツっていうのをやろうと思ってるんだと、企業の方向けに。そこに宗教っていうのを入れなきゃいけないんだけど、これがどうにも難しいというお話でした。

次回、タケムラ先生の東洋思想、日本思想っていうことをお話しくくださるので、そちらと互換的なところがあるのではないかなと思うんですけれども。確かに、現代日本において教養とかリベラルアーツっていうのも、宗教が縁遠いのも、むべなるかなとかいうか、それは非常によく分かるんですね。ただしとかいうか、リベラルアーツとか教養っていうときに、もともとは宗教とは近かったはずですよっていうところから始めたいと思うんですけれども。

中世のヨーロッパであれば、『哲学は神学の婢女』っていうふうにいわれてたように、神学や宗教についての学問、研究っていうのが中心にあったわけですよ。だけれども、近代になって人間の学知、最初は神がつくった世界を解明するっていうつもりで科学も発展してきたというふうには、もちろん承知をしていますけれども、だんだん、そっちが自立していくわけですので、そのつながりもあるけど、だんだん独立して、そこでフマニタス、人文学という形になっていくわけですね。これは宗教から自立してるところと、つながりもあると。

日本で現代においてリベラルアーツっていうと、とりわけアメリカのリベラルアーツ・カレッジなんかの影響が大きいでしょうし、それは戦前からあったのかもしれないけれども、戦後、特についていることがあるかと思いますが。でも、日本でも実は戦前に教養って言ったものは、ドイツのbildungっていう、人間を文化で形成するっていうようなことですが、知識を通しての人格の陶冶、人格の完成みたいなことは日本にもあったんですね。明治後期から大正期ぐらい。教養主義みたいに言いますが。そこにおいては宗教っていうのは、実は、かなり大きなウエートを占めていたということがあります。

明治維新から殖産興業とか富国強兵とかっていうことで、政治、産業、経済、軍事、そういうところに力、入れてきて。けれど、一世代たって、社会の流動化も、ある程度、収まってっていうときに、その西洋の学問とかを精神から学ぼうじゃないかみたいなことがあって。あと、その社会の流動化が少し収まったことで、若者、知識青年たちですね、割と人生に悩むっていうことがあったりして、そこで宗教って結構、大きな役割を果たしてたってことがあります。

実は私、宗教学というところの出身で、私は修士論文は、明治後期から大正期にかけての日本の教養と宗教っていうテーマで論文を書きました。その後、フランスにフィールドを大

きく移して、留学したりとかっていうことになるんですが。ちょっと自己紹介的な意味合いも兼ねて最初に紹介をさせていただいて。

戦後になると、日本では宗教の位置というのが、近代化、産業化、世俗化っていうことで割と周辺化されてくというか、社会の中心には来ないわけですね。信教の自由っていうのが保障されるので、新宗教なんか割と雨後のたけのこのようにというか、戦前は弾圧なんかされてた宗教が割と活発に活動するとか、そういう側面もあったんですけども、大勢はというか、メインストリームを見れば、そんなに宗教ってそこまで大事じゃないというか、なくても生きてけるというか、社会は動く、回るっていうことでやってきて現在に至るということかと思えます。

他方で、世界的な宗教復興の潮流というものが冷戦以降って見てもいいかもしれませんし、1979年のイラン革命、さらに、さかのぼれば1967年に第3次中東戦争っていうのがあって、あれでイスラエルがアラブ諸国にかなり圧勝という形で。そのときに、それまでアラブの社会主義でやってきた国々が、これじゃちょっと駄目だっていうところで、イスラームっていうものに自分たちの思想と行動の拠点を置くみたいなこともあったんですね。だから、20世紀の後半あたりから、いろいろなところで宗教復興といわれるような動きが出てきて。アメリカであれば、1980年、レーガン大統領が当選するというようなときに、宗教、右派なんか大きな役割を果たしたとかあるわけですよ。

そういった世界的な宗教復興の潮流がある中で、日本は宗教復興とは言えないと思いますね、やっぱり。そうすると、世界を理解しようと思ったときに、その間の大きな溝というか、齟齬というか、理解の懸け橋がなかなかなくて困るというようなことがあると思います。

ビジネスマンにとっての宗教に関するリベラルアーツというか、教養というかっていうと、駐在に行ったときにどういうことを注意すればいいのかとか、その辺なのかなとも思いますけれども、それでいうと、ここ、今、一応例を挙げてますけれども、きょう、朝、皆さんのほうにも行き渡ってるんじゃないかなと思いますけど、レジユメのほうにも書きましたが、井上順孝先生の編著、『90分でわかる！ビジネスマンのための「世界の宗教」超入門』ということで、例えばこういうのとかですね。

イスラーム圏であれば片倉もと子さん、人類学者で。旦那さんが片倉クニオさんっていつて外交官ですね。実は私、片倉もとさんはもう亡くなってるんですが、旦那さん、まだいらして。私、伊達姓なんですけど、片倉姓で、伊達と片倉って、片倉小十郎の片倉ですね。本籍、宮城県で、私は旦那さんとは実は仙台のお寺で会ったことがあります。きょうの本筋とは関係ないんですけども。この片倉クニオさんのとこに付いていきながら、片倉もとさんはイスラームの日常世界っていうことも見て、非常に、これは、91年の本だから随分前の本かもしれないけれども、イスラーム圏で暮らすなんてときにはいいかもしれません。私、こんなこと偉そうに言ってますけど、私自身はイスラーム圏といえる国、社会で暮らしたことっていうのはないんですね。だから、私はこっちの方面ではあまり語る資格が、きよ

うはないかなというふうに思うんですけども。

フランスのライシテを中心にするという話をさせていただきわけなんですけども。フランスに、私、5年間いたんです。2002年から2007年まで。2017年ってのがサバティカル休暇があって、そのときにはカナダ、カナダっていうと英語じゃないの？って思うかもしれないけど、ケベック州っていうのが東のほうにありました。そこ、フランス語圏なんです。ケベックに1年おりました。だから、そこは二つのフランス語圏の社会っていうことで生活したことがあります。

2000年代の前半にフランスにいたとき、ちょうどシラク大統領でした。2期目だったんです。2002年から2007年。去年亡くなりましたけど。それで、2004年に、いわゆるヴェール禁止法っていうのが採択されて、このスライドに映ってるのはスタジー委員会という賢人会議のような委員会が開かれて、そこで法律が採択されました。下にいるのがベルナール・スタジーという人の顔写真ですけども。

これ、9.11の後だったわけで、2001年の。世界的にイスラーム教徒に対して厳しい目が向けられていた時期だったと思います。フランスもしかりで、やっぱり、そういう文脈抜きにして、この法律ってのは、やっぱり考えられないんじゃないかなと思いますけども。1989年に初めてスカーフ事件っていうフランスで起きて、そのときはパリの郊外の女子中学生がスカーフをかぶってきて、学校長が外せって言ったけど外さない。それが結構、国民的な議論になって、世論を二分するような論争になったんですけど。でも、そのときは着用すること自体は別にライシテというフランスの国の原理と矛盾しないと。ただ、スカーフをかぶって隣の生徒とかを勧誘してイスラーム教徒にするとか、そういうことしちゃいけない。けどスカーフ自体は別に大丈夫っていうふうに言ってたんですけども、9.11を経て、フランスのムスリムの女性ってのは、スカーフかぶってるってのは強制的にかぶらされてるんだと言うんです。郊外においてイスラーム原理主義の躍進が目覚ましいとか、そういうふうな考え方、力、持ったっていうところが、やっぱりあったと思います。それで、こういうふうな法律ができて。

日本の世論、あるいは英米圏の世論なんかもそうだったんですけども、これは、ムスリムであり、しかも女性であるっていう、二重のマイノリティーに対する抑圧的な法律なんじゃないかっていう議論があったと思います。今でもあるんだと思うんですけども。私は、それは多分、もちろん正しいと思うんですが、フランスの社会統合とか社会のルール仕組みっていうのを内側からといいますか、歴史の来歴も踏まえて考えると、禁止をする論理っていうのも分からないでもない。それが、私からすると、日本に戻ってきて先生とか、要するに頭いいはずの人なんですけど、話してもあんまりかみ合わないんですね。あんま分かってもらえないっていうようなことがありました。だから、フランスって結構、特別というか特殊というか、いうところがあるんだなと思ひました。

結局、なんでスカーフを外すっていうのが、一応、理にかなってるかという、共和国っていうのは人を、個人を宗教だとか、人種だとか、肌の色だとか、性別だとか、そういうの

で差別しないっていう建前があるんですね。人権の祖国、母国であるフランス革命の国であって。その差別をしないということと、スカーフをかぶらないとか、かぶらせるってことが少女たちに対する抑圧だったら、それを取る手助けをすることで開放するんだっていう論理があったんですね。それも確かに男性中心主義的な、おせっかいじゃないかっていう考え方はあるんですけども。そういう考え方っていうの、やっぱりライシテ、フランスの宗教と世俗の歴史を振り返って考えないと、こんなの分からない部分があるっていうところがあります。

参考文献とかには挙げてなかったですけども、ちょうど、この『思想としての〈共和国〉』っていうのが 2006 年に出版ですけど、これが非常によくできた本だと私は思います。実際、副題が『日本のデモクラシーのために』というふうになって、フランスの共和国っていうことを日本の文脈でどう考えるかっていうことも論じられてまして。これの増補改訂版、増補新版っていうのも 2015 年か 16 年かに出てて、ちょうど 2015 年の安保のときの写真が表紙に使われてますけれども。だから、フランスと日本の関係を考えるのには、こういうのもいんじゃないかって思うんですが。

今、だから、私、二つのことを言って。いわゆる、確かにヴェール禁止法ってのはイスラム女性に対して厳しいところがあると、半分は認めると。けども、そうじゃないっていう、フランス特有の論理っていうのも大事だっていうね。

共和主義っていうのは何かっていうことなんですけれども。これ、旧体制下といいますか、1789 年の革命以前のフランス社会を、かなり単純なモデルにしたものですけども、王が社会の頂点にいて、聖職者・貴族、第 1 身分、第 2 身分、第 3 身分といたわけですけども。身分制社会ですよ。で、平民と、いて。そこまでがギルド社会っていうのがあって、だから、木靴を作る職人であれば、その職人社会に帰属してるだとか、そういった社会があったんですが。王は政治的な社会の頂点ですけども、ある種、宗教が王の政治権力を正当化する役割を果たしてたというか。人間の社会でも、実は人類学的に考えても、割とそういった社会がもともとは多くって、自分たちの社会を政治的に正当化するには、どっかから正当化の源泉というものを調達してこなきゃいけないわけですね。それが基本的には宗教だったということです。かなりざっくり言うと。けども、フランス革命でも、ある種、王様の首まではねてしまうわけですから、フランスは。

これを、だから、他律社会といいましょう、ヘテロノミーっていうものですね。人間の社会が人間の社会で自立してるというよりは、正当性の源泉を他のところから引っ張ってきてるというモデルだとすると、ある種、共和主義モデルっていうのは、社会の中で自立した社会をつくる。社会を動かしていくときに、一般意志というものが社会のルールだけど、これは、その社会の成員、人々がつくるんだということですね。だから、それ、つくるの個々人なわけで、個々人が政治参加をすることによって、この一般意志をつくるということなわけなんです。自分たちの作った法律だから社会のメンバーはそれに従うと。個々人というのは、それまでのギルド社会だとか宗教団体とかからは解放されて自立した個人であると。一

応、こういうのが共和国モデルの、一つのフィクションっていえばフィクションなんですけれども、モデルとしてもものすごく機能しています。

だから、ヴェールの禁止なんてのは、なんで起こるかっていうと、現代で考えると、フランス社会ってというのがあって本当はフランス社会に暮らす人々ってというのは個人個人でなければいけないはずなのに、イスラームっていう集団があって、そのこの集団の論理でもって女性にはスカーフをかぶれなんて形で、ギルドとか中間集団、この社会内社会の論理でもって個人が抑圧されてるって見えるんですね。そういうふうに見えてしまって、それは共和国らしくない、解放しなければいけないっていうふうな論理の筋道なんですね。

だから、私はこのモデルに引かれてる部分もあるんですけど、確かに、でも、そのためには、当のスカーフをかぶった女性たちに何を考えているかとか、あなたの意志は本当は何なのっていうふうに聞くべきだと思うんですね。その内容は非常に多様です。それは、新書で、『ライシテから読む現代フランス』の、ヴェール、のところなんかを読んでいただけたら分かっていたんじゃないかなと思うんですけど、多様なんです。だから、そこは、でも、聞かないで法律は作っちゃう。そこは非常に問題だということですね。

だから、共和国のモデルってというのは非常に魅力的な面もあるけれども、やっぱり、いろいろ問題も抱えてると思っていて。それもあって、私、フランス研究者ですけど、フランスのモデルだけじゃなくて他の社会も見たほうがいいといいますか、やっぱり現代の日本だとアメリカっていうのおっきいですね、特に戦後は。ただ、サバティカルときにアメリカに行くかっていう考えはあんまりなくて、フランス語圏って思ったんですが。カナダのケベック州だったら新大陸でアメリカの隣国ですし、モンリオールに私、いたんですが、モンリオールも本当に英語とフランス語のバイリンガルみたいな社会なんですね。モンリオールだとかケベックだと、この間文化主義っていう考え方、インターカルチュラリズムっていう考え方があるんだってというようなことで、これも魅力的だかっていうか。だから、フランスの共和主義モデルと、あと、多文化主義、多文化主義ってというのは、マルチカルチュラリズムっていうことで、話、聞いたことあるんじゃないかと思いますが、間文化主義、インターカルチュラリズムって、それに比べるとあんまり聞かないんじゃないかなと思います。

どういう話かっていうと、多文化主義ってというのは、だから、英米系なんかもそうですけれども、それぞれの社会に主文化といわれる文化があると。だけど、今日、多様だから移民社会であつたりもするわけですね。人々の移動も多いし。だから、社会の中に、別の、サブ、副文化っていうのもあると。これを認めていくってというのが多文化主義だということになりますね。これの、もちろん、多様性の承認だとか人権とかっていう観点から、さまざまなサブの文化ってというのは認めていく必要はあるんだけど、でも、このモデルだと、実は、この主流の文化に同一化しないとか、ここの交流があまり活発に行われなかったとか、そういった問題もあるっていうふうにも指摘をされてまして。

そこで、ケベックってというのはカナダだけでもフランス語圏であって、フランスの共和主

義とカナダとか他の社会の多文化主義の、理念的に言えば、いいところ取りをしようとするようなモデルっていうのを開発して、それっていうのは社会の共通原理っていうのは共有しよう、主文化。けども、今日においてはさまざまな文化があって、それをケベックならケベックでフランス語とか、男女平等とか、ライシテとか、そういうふうな、みんなが共有すべき理念っていうのがケベック社会にあって、それは、共有する中で、この文化間の交流も促そうと。だから、さまざまな外から来たような文化も私たちの社会になじんでいく。私たちの社会も、実は、こういうふうな文化との交流によって少しずつ変わっていくっていう、ですね。こういった、だから主文化も変化していく、新しい共通文化。こういったモデルをケベックが開発してるっていうところがありまして、それで、私の中ではフランスとケベックと日本の三角測量みたいなことで、ものを考えられればいいんじゃないかななんてことで研究をやってきたところがあるわけです。

話が、導入といいますか、長くなりましたけれども、レジユメで言うと、1の『世俗と宗教』というところに移っていかうと思うんですが。ライシテという言葉、今回の課題図書なので皆さん聞いたことがあるということだと思いますけど、そうじゃないと聞いたことがない、それまでは聞いたことがなかったんだと、珍しくないんじゃないかと思います。それを説明しようと思うんですが、大きく言えばというか、もし英語に訳すなら何ですかとか、日本語に訳すなら何ですかっていったときに、一つ、secular、世俗っていうのが答えだと思います。

私、宗教学っていう学問をやってきたわけなんですけれども、そうすると、何の宗教を研究してるんですかって言われるんですね。キリスト教ですか、仏教ですか、イスラームですか。そういう質問が来るのは当然だと思うんですけど、でも、私、キリスト教の専門家とか仏教の専門家ってわけじゃなくて、さまざまな宗教を比較したりとか、むしろ、近現代の社会の中で宗教がどういうふうな位置を占めてるかとか、世俗と宗教っていうのがどういうふうな関係を結んでるんだろうか、そこが面白いと思ってるんですね。

レジユメのほうにタラル・アサドという人の言葉を引用しておきましたけれども、『「宗教」を理解しようとする学問は、その対となるものの理解にも努めなければならない』、この対となるものっていうのが、世俗、secular ということですね。このタラル・アサドっていう人はお父さんがロシア系ユダヤ人でジャーナリストだった。中東で生活したんですね。ユダヤ系だったんだけど中東で生活するからってんでムスリムに改宗してるんですね。タラル・アサドのお母さん、お父さんのアサドが結婚した相手っていうのはサウジアラビア人でムスリムだったんですね。タラル・アサドはサウジアラビアで生まれて、インド、パキスタンで育って、イギリスに留学して、アメリカで教べんをとるっていう、本当にグローバル化っていうか、すごい人ですが。

こういう経歴なので、本当に宗教を渡り歩くっていうんですか、ユダヤ、イスラーム、そしてまたイギリス、アメリカだとキリスト教社会っていうことになるかと思いますので、その中で宗教とか世俗の問題を突き詰めて、私たちが今日、宗教研究やるときに非常に重要な

ことを言っていて。それっていうのは、レリジョンっていうのは西洋近代においてつくられたものが世界に当てはめられていったけれども、それじゃあ解読し切れないものがある、理解できないものがあるっていうことを言ったんですね。西洋近代のレリジョン概念っていうのは端的に言えばプロテスタント的と言いましょか、個人の内面、その内面を支える個人主義と神との対話といいますか、そういった、本当の宗教っていうのは心の中にあるものだと、それが近代西洋的なレリジョンの中核にあってですね。けど、それってどうかというと、例えば未開社会っていわれるような所に出て行って、現地の人たちの慣習、習慣を見てみると、個人が内面的に自立してないように見えるわけですね。当時の人たちの目にはおかしい風習と見えたりもするわけです。そういうのが劣った宗教に見えてしまうわけですね。

西洋が世界進出をしていって、世界のさまざまな宗教を発見し、分類し、クラス分けしっていうのが、始まりはそれこそ大航海時代から始まりますけど、19世紀、20世紀、帝国主義、植民地主義の時代に成されて。それが、でも、やっぱり、今の学知の中では非常に批判的に見られる、反省のまなざしにさらされるっていうことで、だから西洋的なレリジョンだけでは世界の宗教は理解できない。そこの差に注目するものが大事だということ。きょう、質問なんかでも、日本の宗教をどう考えるかっていうことが後から出てくると思いますが、日本の宗教っていうのも、だから、西洋の宗教、レリジョンの考え方だけだとやっぱり読み解けないっていうところがどうしても出てくるんだと思います。

彼は非常に、そういった理論的な貢献をするわけだけれども、でも、アサドのモデルは割とプロテスタント中心的でもあってですね。ライシテっていうのはフランスが特に代表例ですけども、カトリック文化圏に特有なところもあるといいますか。どういうことかという、もともと、この言葉っていうのはギリシャ語のラオス、これ、人民、人々っていう意味です。中世のラテン語でもライークスってあって、ここから来てるんですけども、これは、上に laïc モデルということで、この、c、を使ってるモデルですが、これ、形容詞なんですけれども。当時はみんなカトリックっていう建前ですね、中世なので。そうすると一般信徒っていう、それとまた、出家をする聖職者がいたわけです。だから、出家をする聖職者は聖職者だけでも、一般のカトリック教徒のことを laïc って言ってたんです。一般信徒のことです。

だけれども、フランス革命とかがあって、別にカトリックじゃなくてもっていうか、宗教を信じなくてもフランス市民になるわけじゃないですか。そうすると、下の laïque モデル、que、のほうですけども、そもそも教会という組織とか、考え方とか、価値観といいますか、そういう外部にあるようなもの、これが laïque、ライシテというふうになっていくわけですね。

こういう言い方で、少しプロテスタント系とカトリック系が分かっていたかどうか。プロテスタントの宗教改革っていうのは16世紀に始まっているので、当然、すったもんだとか宗教戦争とかありましたが、宗教自体が近代的な考え方と割とマッチするんですよ。だけれども、フランスは何度も勅令は出しましたが、それをルイ14世が廃棄して、

カトリックが国教のままでフランス革命を迎えました。そのときに革命の理念とカトリックの考え方ってのは正面衝突してしまう。なので、フランスにおいては、あるいはカトリック系の国々においては、近代的な価値観と宗教的な価値観ってのは正面衝突しがちなんですね。ライシテというのは、その宗教、カトリックと正面衝突するようなものと取りあえずは理解していただいて、イメージをつかむには、いいかと思います。

よくライシテというのはフランス革命以来といわれるんですが、フランス語としての初出は第3共和政なんですが、1871年っていうふうに書いてます。この *laïque* っていうのは、形容詞としてはラテン語とかギリシャ語にさかのぼるんですが、名詞化したライシテという言葉は第3共和政の言葉になります。実際、第3共和政の中で政教分離とかも制度化されていくんですね。それ、もう少し先で言いますが。

19世紀のフランスっていうのはカトリック対、共和主義といいますか、そういった二つのフランスの争いというのに非常に特徴付けられておまして。これ、子どもを育てるのに共和国的な考え方で育てるのか、それともカトリック的な考え方で育てるのか。このスライド、小さくて見えにくいかもしれませんが、こちらの人は、ここ、ヴォルテールって書いてますね、ヴォルテールを読めと言って子どもを育てる。啓蒙主義ですね。こっちにはカテキズムって書いてるんだと思いますが、カトリックの教理問答ですね。同じような、これは19世紀の半ばですけれども、19世紀の後半、20世紀の初頭かもしれません。こういうふうな風刺絵もあってですね。カリカチュア。子どもの耳をつかんで、怖そうな中年の女性2人です。これ、女性なんですけど、これ、フリジア帽をかぶっているのがマリアンヌで、共和国の象徴なんですけど、私の言うことを聞けということ。こっちのほうには、これは兵舎ですかね、公立校、行って、役所とか軍隊とかそういった感じの近代的なというか、脱宗教的な世界観であって。こちらのほうは修道女ですね。こっち行けば先には教会が見える。この二つのフランスの争いっていうのが19世紀のフランスでは激しく展開されておまして、それを担い、また調停に持っていくっていうようなことが19世紀後半からありまして。

これが第3共和政の Jule Ferry っていう人ですね。教育大臣でもあり首相も務めたということで。こういう例えが適切かどうか分かりませんが、ものすごくつかみやすく分かりやすく言うと、福沢諭吉と伊藤博文みたいなイメージで捉えてもらおうと日本の近代化と似てる部分があるかなというふうにも思いますが。というのは、啓蒙思想家なので、宗教じゃなくても道徳的であることができるっていうことで、それまでカトリックの道徳教育だったものを非宗教的なライシテの道徳に置き換えたというのが彼の功績です。他方では植民地主義なんかを主導して、ベトナム、トンキンの辺りに進出したっていうのも彼の時代でした。これが1880年代のことで。

1900年代になって政教分離が行われるんですね。この右側の絵が政教分離がなされるときのカリカチュアということになりますが、それまで教皇庁とマリアンヌ、フランス共和国を結び付けていた絆、これを、これは Emile Combes、この人が一挙両断、断ち切ろうとしているわけですね。ここにいるのがヴォルテール、光を当ててるというようなことなんです

が。

政教分離っていうのは、それまでカトリックを優遇してきたフランス共和国がそれを切るというようなことなので、教会にとって非常に厳しいものがあったというふうに思われてきました。語られてきました。フランス人の記憶の中でも政教分離っていうと、Emile・Combes だろうというふうな通念、記憶が強かったんですね。実際、この Emile・Combes っていう人は修道会を 2000 ぐらい閉鎖したりとか、修道士、修道女の教育を一切禁じるとか、フランス国内で、そういう法律なんかを制定したり、かなりカトリックに厳しいものだったんですが。

でも、実は、このフランスの政教分離法って 1905 年に制定されてるんですが、12 月に発布されてるんですね。成立したのが 12 月です。実は、この Emile・Combes っていう人は 1 月に辞任してるんですね。その後、3 月からの議会で法律が採択されていて。もちろん Combes も法案を出してるんですけど、Combes 法案っていうのが通ったんじゃないんです。次にお見せしますが、実際に通った政教分離法案っていうのは、この Francis・de・Pressensè っていう人が書いた案を、この真ん中の Aristide・Briand っていう人が議会の委員会の報告者としてまとめて、それを下院に掛けて、その審議では、右側の Jean・Jaurès なんかが重要な局面でその法案を通すのに貢献したと、そういうものなので。

さっき言った Combes と、この 3 人の法律がどう違うかっていうと、良心の自由、礼拝の自由っていうのを認めるっていう条文がかっちり入ってるんですね。それをレジユメのほうにも書いておきました。1905 年の政教分離法、『共和国は良心の自由を保護する。共和国は、公共の秩序のために以下に定める制限のみを設けて、自由な礼拝の実践を保護する』、それと、第 2 条『共和国はいかなる宗派も公認せず、俸給の支払い、補助金の交付を行わない』、この二つがセットだということがポイントでですね。つまり、それまではカトリック教会を中心にプロテスタント、ユダヤ教も公認宗教だったので、国から補助金というか、そもそも聖職者は国からお給料をもらう公務員だったわけですね。それ、もう給料出さないから独立して勝手にやってくださいと、ある種、国から見捨てられた格好になるので、それは分離ですよ。厳しい措置と言えど厳しい措置。けども、その代わりに礼拝を組織するような自由も与えられてたっていうことがあるわけです。

これ、フランス、そしてまたヨーロッパ、大体、国々そうなんですけど、もともと王国だったところが多いので、そうすると、政治が宗教を管理するっていう考え方が実は強いんですよ。アメリカ合衆国は宗教系の移民が出ていくので、そういった宗教移民のつくった社会なので、王国があったわけではないので、国が宗教を管理するっていう側面、弱いんですけど、ヨーロッパの国々は国が管理する。国が管理するっていうのは、お金は出してもらえなくても言うことも聞かなきゃいけないっていうところが多かったわけですが。もう金銭的に自立でしてください、でも自由ですよっていうことで、それを認められたってことも、一応ちゃんと見ておく必要があるんですね。だから、フランスの政教分離っていうのは、厳しい、厳格だっていうふうにいわれるんですね。それは他の国々と比べてそういうふうに見

えるっていうことは確かに理解できるんですけど、でも、しっかり良心の自由、信教の自由を保障してる国だっていうことも同時に見なければいけないと思うわけです。

カトリックは、当初はこの案を受け入れてないんですね。実は、このときにバチカンとフランスって国交を断絶してるんですね。1904年からバチカンとフランスは国交を断絶してて、この法律ができたときってのはバチカンとフランスは国交がなかったの、バチカンからしてみれば、とてもこんな法律認められないってことで、全然、承認も何もしてないわけですよ。してないんだけど、第1次世界大戦があつて、第1次世界大戦があると特にドイツを相手に、さっき言った二つのフランスの争いというのが挙国一致体制でまとまってくるっていうところがあるわけです。カトリックの学校に通ってた若者と、ライシテの共和国の学校に通ってた若者、それぞれ、先生からカトリックのやつらっていうのは、こんなひどいんだとか、共和国の学校に通ってるやつは神なんかを信じてなくて人間じゃないみたいなのを教えられてたんだけど、実際に戦場で戦友として出会ってみると、結構、話せるとか、分かりあえるみたいなことがあつて。だから、割と、第1次世界大戦を通して、二つのフランスの争いが収まってたっていう面があります。第1次世界大戦後に、実は教皇庁とフランスの国交も回復するんですね。回復して、1905年法の枠組みを教皇庁も、1024年なんですけど、一応、認めるっていうことになっていくわけなんです。

20世紀、進むにつれて、だんだんカトリックが、このライシテの枠組みっていうものを受け入れていくことになります。1946年が、これ第4共和政っていうことになります。58年が第5共和政ですね。その46年の第4共和政で、ライシテっていうのがフランスの憲法の中に書き込まれます。フランスはlaïqueな国であるって。一応、そこでコンセンサスができたっていうふうに言っていかなと思います。

19世紀フランス革命以来、19世紀を通じて、20世紀に入っても、カトリック対、共和派の二つのフランスの争いっていうのは続いてきました。1946年、58年で一応コンセンサスになった後も、その名残といいますか火種が残ってたものが時々再燃するってことはあつてですね。

左の上のほうは1984年なんですけれども、ミッテラン政権で、左派で、フランスの学校を全部公立校にする、私立も統合しちゃうっていう案を出したんですね。そしたら、カトリックのほうは私立学校なので、そんなのとんでもないっていうことで100万人デモやって廃案に追い込みました。下のほうは、94年なんですけど、これは学校に、私立に対する補助金の上限を撤廃するみたいな法律を通そうとしたんですね。そのときにライシテ派がやっぱり反対して廃案に追い込んだ。

だから、教育を特に主戦場として二つのフランスの争いっていうのが20世紀後半以降も残り続けるんですけど、でも、他方において、左右の対立っていうものは緩和してくという面があります。これ、ミッテラン大統領、シラク、パリの市長だったり首相だったりしたわけなんですけど、右派ですね。ミッテラン政権のときにコアビタシオンといって、保革共存なんていわれたりもしますけれども、大統領が左、首相が右なんてことがありまして。シラク大統領

のとき、シラク政権でも大統領が右、ジョスパン首相、社会党、左。こういったコアピタシオンなんていうのもあって、ある種、政治の右と左で対立をしてる、だから政局がうまく進まないって意味でもあるんだけど、でも、ある種、右も左も似てきたといいますか、その対立が収まってきたという面もあるわけです。

スカーフ事件のほうにまた話が戻るんですが。こういったときに起きたのが1989年のスカーフ事件なわけです。1989年っていうのはフランス革命200周年であり、また、ベルリンの壁が11月に壊れて冷戦の終結っていうことになって東西の冷戦が終結して、ハンチントンなんかは文明の衝突と言って、次はイスラームと自由主義社会というか西洋社会の対立が問題になるなんて言ったりしたわけですけども、このときに最初のスカーフ事件っていうのが起きるわけですね。

これが、新書のほうにも書きましたけれども、それまでにない問題を突き付けたということがあったと言えるかと思います。これは、とりわけ、当時ミッテラン政権で左派なんですけども、左派にとって非常に悩ましい問題だったわけです。なぜかという、リベラル左派っていうと多様性に寛容っていうふうなイメージがありますよね。ミッテラン政権の中にもそういうリベラル左派で多様性に寛容っていう人が、スカーフを認めてもいいじゃないかと言う人たちがいたわけです。けども他方で、左派っていうのはフランス革命以来、右のカトリックと戦ってきて、宗教と共和国っていうのは戦ってきたんだと。共和国の学校に宗教は要らないって言うんですね。そういった対宗教、戦闘的な左派っていうのもいるわけです。そうすると、左派の中でもヴェールを認めるか認めないかって大論争になって、うまくまとまらなかったっていうところがあったわけですね。

ですから、それまでは主に対カトリックをメインテーマとしてライシテの問題っていうのが語られてきたわけですけども、1989年以來はイスラームというものを意識しながらライシテっていうものが語られていくといったところがあるわけです。これが共生の原理なのか排除の原理なのかっていうのが、とても微妙な問題っていうか悩ましい問題といえますか。実際、排除の原理、フランスのナショナル・アイデンティティーがライシテなんだから、それに、郷に入れば郷に従えで、言うことを聞かない人たちは要らないっていう、極右とか、ごりごりの左派にもそういう人いるわけなんですけども、そういう論理にもなりかねない。排除の原理にもなりかねない。

けども、いや、ライシテっていうものは信教の自由だって保証するわけだし、個々人の権利を認めて、政治参加を促して私たちの共和国をつくっていくものなんだから、個人としてのムスリムは当然受け入れられるべきだっていう、そういう法説、共生の原理としても鍛えられてくるところがあるわけですね。こういった中に置かれたムスリムが、ライシテっていうのは、自分たちが、あるいはムスリムにとって、良心の自由とか信教の自由を保障してくれるものなら十分に受け入れられるものだって考えるムスリムも多いんですね。多いんだけど、でも、そんなライシテはやっぱり欺瞞だとか、何だかんだ言ってムスリムを排除するものだとか、そういうふう考えるムスリムもそれは一定数いる。少ないとは言い

ません。多いとも言えると思います。それがやっぱり、共生というものを非常に難問にしているところかなと思います。

このナショナル・アイデンティティーになってくっていうときには、だから、だんだんライシテの右傾化ということも言えると思うんですね。もともとは左派の原理だったのが、このヴェール禁止法っていうのは右派のシラク政権で制定されるわけで、その後、サルコジ大統領、2007年から2012年の大統領、任期でしたけれども、彼は割とそれまでになかったライシテ感っていうものを持っていてですね。下なんかは、これ、ベネディクト16世、当時の教皇と仲むつまじい様子。これ、上のほうはパリの大モスクですが、イスラームの有力な人たちと、これも交流してるというか仲むつまじくといえますか。だから、ライシテっていうと政教分離と思うかもしれませんが、サルコジなんかは割と宗教者とよく会って、共和国に宗教は必要だっていうふうに言ってたんですね。共和国に宗教は必要だ、開かれたライシテだと、宗教の必要性を認めるのが自分のライシテだなんて言ってたんですね。

だけでも、サルコジ大統領のときに、ニカブとかブルカを禁止する法律もできてるんですね。これ、一見、どうしてそれが成り立つのかって思いませんか。イスラームとも、ちゃんと接点をつくらうとする大統領と、排除しようとしてる大統領、これがどういうふうになってるかっていうと、彼にとっては政治利用できるって言っちゃあ短絡的過ぎるかもしれないけれども、治安の維持に役に立つ宗教は活用すべきだっていう考え方なんだと思うんですね。当時、郊外の問題、既にありまして。郊外に共和国のエスタブリッシュメントがムスリムの郊外の若者のところに行って共和国の理念ってのはこうだって聞いても、やっぱり、話、聞いてくれないと思いますね。だけでも、郊外の若者もイスラームの指導者の言うことだったら聞いてくれるかもしれない。その指導者の言うことを、共和国から見て登用できる人にしたいわけですね、制度側としては。だけでも、若者たちっていうのは、割と郊外のムスリムたちの、こういうエスタブリッシュメント系のイスラームの指導者たちを警戒しています。あんまり好きじゃなかったり、言うこと聞かなかったりします。でも、サルコジからしてみれば、共和国統合から外れるようなイスラームとかには厳しく望むっていう姿勢になりますので、ブルカとかニカブっていうのはそういう対象になったというところがあるかと思います。

実は、2004年の学校でのスカーフ禁止法と2010年のブルカ禁止法って一直線でつながるように見えるかもしれませんが。ライシテの強化っていうふうに見えるかもしれませんが。だけでも実際には、2004年の学校の法律っていうのはライシテの法律なんですけど、2010年の法律にライシテって言葉、出てこないんですね。なぜかっていうと、良心の自由と信教の自由は認めなきゃいけない。だから、ブルカとかニカブを、良心の自由だ、信教の自由だっていうふうにかぶる人を禁止できないんですね。

そこで、なんで2010年、こういったブルカ、ニカブを禁止できたかっていうと、治安っていう公的な秩序っていう概念で、顔を覆うと誰か分からないから治安に問題がある、そういう論理で禁止をしてたんですね。だけでも、これ、実は、フランスの人口って6000万人

超えてるわけなんですけども、この法律を作ったときにフランス全土で2000人もいないんじゃないかっていわれてたんですね。だから、これは本当に見せしめ的な法律なんじゃないかとか、蚊を退治するのに大砲を持ち出すようなものだとか、かなり批判はされてたんですね、そのときね。見合っていない。

けども、サルコジは右派の大統領で、極右と言えるかどうかといえはなかなか極右と言うのは難しいと思いますけども、もちろん視点によってはそういうふうを考える人もいるかもしれませんが、ただ、ここの右下のほうは、このルペンを支持する人たちっていうことで極右政党の支持団体なんですけど、そうすると、あたかもフランスがイスラームに支配されているかのような地図ですね。だから私たちは団結してこういう危ない宗教は排除しなきゃいけないみたいな呼び掛けですけど、でも、6000万人いての2000人ですよ。これがリアリティーがあるかどうかっていうことも併せて考えなければいけないところかなというふうには思います。

レジュメの2ページ目になりますか、2のあたりで。既に部分的には幾つか論点は先取りして話してる格好になるかなと思いますけれども。ライシテは共和国の原理と結び付くので、個人は人種とか宗教とか問わず人権が認められるっていうふうにいわれるわけだけど、なんでそれが、この共生の原理が機能しないんだろうかということですね。

フランスの人権宣言は普遍的な人間観をうたっていると思います。けれども、そのフランスっていうのが実は植民地帝国でもあり、世界に進出して行って現地の人を虐げたりとかいう経験も歴史の中では当然あったわけですね。そこをどう考えるかっていうことになるわけで。普遍的人権にも関わらず植民地主義帝国なのか、普遍的人権を掲げたからこそ植民地帝国になったのかという問いが立てられるかと思います。つまり普遍的な原理を革命で打ち立てたから、それを世界に広めなきゃいけないっていう文明化の使命ですね。文明化の使命でもって人権の理念が世界を一回りしたという面はあると思います。けども口では人権を唱えてるけれども、やっぱり植民地主義で2級市民をつくったり、現地の人を人間としてしっかり扱ってなかった面っていう、やっぱ、それが今でも尾を引いているということになるのかと思います。

ですから、特にアルジェリアなんかは1830年から1962年まで132年間フランスの領土で、血みどろの独立戦争というものがあって。1960年代、アルジェリアのみならず、マグレブ3国が、他にも西アフリカとか旧フランス植民地が独立して。そうすると、宗主国と植民地の関係って、言語の問題もあるけども経済の関係もあるから切っても切れないわけで、フランスの移民っていうのも旧植民地から来るっていうことが多いわけですね。そうすると、やっぱり植民地主義以来の差別的な視線とかそういうものは根深くあるので、差別にも、どうしたってつながりやすいっていう面もある。

けども独立はしてるわけだし、移民としてやってきた2世、3世、そうするとフランス生まれフランス育ちですからフランス人ですよ。フランスの人権とか共和国ってのはこういうものだっていうふうに見える。その理念も内面化する。内面化して、確かに共生

が実現されてるっていうふうにする人もいるかもしれない。けども、その理念と実際があまりにかけ離れてるっていうようなことで、やっぱりおかしい、欺瞞だって思う人もいる。そういったところが、一つおっきなところなんだと思うんですよね。だから、『共生の原理が機能しないのはなぜか』っていうときに、理念は立派だけど実際が違ふとか、あるいは、理念自体が欺瞞であるように用いられてる面もひょっとしたらあるのかもしれないということですね。

でも、当然、このフランス社会における分裂っていうものはどんどんひどくなっていく面っていうのはあるわけで。とりわけ 2015 年にパリが 2 回の同時多発テロ、シャルリー・エブド事件と、11 月のパリ襲撃事件というので襲われていますから、どうにかしないといけないっていう、当局としてもすごい意識があるし、市民としてもどうにかしなきゃいけないっていうふうには当然思うわけで。じゃあどうするかっていうときに、対策で、この新書の中でもアブダル・マリクというラッパー、歌手の例が 3 章の終わりのほうにあったかと思えます。この本の中ではインタビューのところは引用しなかったんですが、このアブダル・マリクっていう人が、あるインタビューの中で、郊外の治安を気にする政策、立法者なんかは住民の交流が大事だっていうことを学んで卓球台なんかを作ってくれと。だけど、割と政策立案者っていうのは、卓球台作った、はい、じゃ、いいでしょ、みたいな感じで、これであまうまくいこうってことで、それ以上のことしない、構わない傾向があるなんて言うんですね。だから、大事なものは、そういった交流できるような設備を作るだけじゃなくって、やっぱり住民とか若者とかに責任を持たせることとか、社会の一員としての待遇を受け入れる姿勢とか、その中で役割をちゃんと与えていくことだっていうふうなことを言ってるんですね。

2 番目として、『集団のメンバーは一枚岩ではない』というふうにも書いておきました。どうしてもライシテ対イスラームとかがあっていうふうには考えちゃうかもしれないし、そう語っちゃうかもしれないんです。とりわけ距離が離れてると。日本とフランスも結構、距離があるんで。そうすると、うまくいってないんじゃないかっていうふうには報道でも言われるし、学者だったりも言ったりするわけですね。そうかなと。確かにうまくいってないところあるかもしれないけど、でも、今、非常に多様化してるので。例えば、今、世界にムスリム、何億人いるんですか。20 億人近くいるんですか。キリスト教徒いづれ抜くっていうふうには言われて。けども、17 億人とか 18 億人とか、そういうムスリムがムスリムっていうことでひとくくりに到底できないわけですね。

カトリックも、もともと教皇庁っていうのがあったし、聖職者の言うこと聞きましょうっていうことで、ごめんなさい、ちょっと話、戻りますが、それで言うと、イスラームのほうにはバチカンみたいな宗教制度がないので、教義でこれが正しいっていうことを言う中心的な機関はないわけですね。もちろんメッカってのはあるけど、メッカに教皇みたいな人がいてイスラームの教義はこうですっていうふうには言うわけじゃなくて。むしろ、もともとはカトリックなんかのほうの方が中央集権的といいますか、カトリックの教義ではこうですって

うふうに語ってたわけですね。

だけど、現代においては、信徒がそもそも、そういうものをもはや聞かないってことです。聖職者はそう言うかもしれ、聖職者の中でも結構意見が変わっているわけですね。ばらばらだったり。同じトピックで意見の一致を見せなかったりするわけです。とりわけ避妊だとか、人工妊娠中絶だとか、同性婚とかだと、カトリックの聖職者ですなんて人も、そもそも意見が合わないわけで。そうすると信徒っていう人も、関わり方いろいろですね。毎週熱心に通うっていう人もフランスで少数だけでもいるわけです。そういう信徒もいれば、一応、洗礼は受けてるしカトリックっていうけど、でも全然教会には行きませんってね。日本人でいうところの無宗教者と感覚あんまり変わらないっていうカトリックだっただけです。だから、そのメンバーは本当に、カトリック教徒とか、プロテスタントとか、ユダヤ教徒とか、ムスリムっていうけど、全然一枚岩じゃない。

本の中でも、ムスリムの多様性っていうことを、スカーフをかぶるムスリムもいるし、かぶらないムスリムもいる、女性ですね。で、かぶる理由もさまざまだと、かぶらない理由もさまざまだということがあるわけだし、ライシテについても受け入れられるっていう考え方もするムスリムもいれば、受け入れられないっていう人も。だから、ライシテとイスラームが対立してるというよりは、フランス社会なんで、そこの中の枠組みは、ライシテっていうのはもう破棄できないんですけど、その解釈自体が非常に多様だと。その解釈を、ある宗教の信者だからこう解釈するっていうのも一概に言えない。そこも本当に千差万別だということですね。その千差万別っていうことと、共和国っていうのは個人が単位なんだということは、実は非常に深く関わっているというふうに思います。

2番目の、三つ目の二重丸で、『マジョリティの「私たち」を批判的に考える』っていうことで。共生を実現するためには、もちろんマイノリティの権利要求というものを認めていくとか、だけでも、全面的に譲るんじゃなくて私たちの社会の中に組み込むような形で入れてくることが必要なんだと思うんですけども、でも、その私たちの論理っていうのが排除の原理であってはいけないわけですよ。あるいは、この、私たちっていうマジョリティのほうにも、差別してるのに見て見ぬふりをするとか、そういう振る舞いっていうのがあるのかもしれない。

フランスは、実は、そういうマジョリティがマイノリティを差別し排除するっていう歴史とも全然無縁ではないんですが、そういったフランス人の在り方を内側から批判する声っていうものもあって、それが、この本でいうと2章ですね。プロテスタントが迫害されていた時代にジャン・カラスっていう人が、子どもが変死をして、首つり自殺をしたんだらうという話なんだけれども、周りの人が、親であるカラスが殺したんだみたいなことで、カラスが満足もいかない裁判にかけられて処刑されたって事件があったんですね。それに対してヴォルテールは声を上げて、卑劣感を粉碎せよ、みたいなのを合言葉にカラスの名誉回復を勝ち取ったわけですね。

それから19世紀の後半にはドレフュス事件っていうのがあって、ユダヤ系の将校で、当

時のフランスの仮想敵の第 1 はドイツだったわけだけでも、ドイツのスパイじゃないかっていうふうに疑われたわけですね。軍法会議にかけられて、それで悪魔島という南米の島に送られて。だけでもドレフュスは実は無罪なんじゃないかということでエミール・ゾラがドレフュス再審のために声を上げたということがあって、真実は前進する、というスローガンでもって世論を変えていったというところもあるわけです。

ちなみに、このカリカチュアというのかな、当時はフランスの、結構、世論を二分するような話だったので、ある家族でのディナー、そのときに主人がドレフュス事件については話さないっていうことにしようと、きょうは楽しい会なんだから。けども実際に参加者たちがドレフュス事件について話し始めてしまったと。そうすると、ああじゃないこうじゃないっていう乱闘騒ぎが起きてしまったというようなことですね。ここにいるのは当時の右翼の大物といいますか、シャルル・モーラスという人で。だから、ドレフュスの再審を巡って、あるいは無罪か有罪かを巡っては当時の左派と右派の間でも激論、論争というものがあって、ゾラ自身も結局は、当時は国の名誉を守れ、軍の名誉を守れっていう世論も強かったので、ゾラは変死して、恐らく暗殺されたんだろうっていうふうにいわれてますけれども。当時の世論としては、なかなか、国の名誉を守れ、軍の名誉を守れというの強かったわけですね。けども、亡くなったゾラをパンテオンに祭って共和国の英雄として迎え入れるっていうんですか、そういう考え方もフランス共和国の中には脈々とあるということですね。

スカーフ事件ということで。それぞれ、だから、対象は、18 世紀であればプロテスタントがフランスにおけるマイノリティーだったし、19 世紀であればユダヤ人がフランスにおけるマイノリティーであったし、現在であれば焦点化される宗教系マイノリティーって言えばムスリムなわけで。そういう事件の中で、どういうフランスの論者がスカーフ事件を巡ってムスリムに対して、やっぱりこれはおかしいというか、非人道的過ぎるんじゃないかっていうときに、どういう声を上げて世論を変えていくかっていうところが見どころというか、ポイントというか、課題として続いているところなのかなというふうに思います。

大体、あと 10 分ぐらいで取りあえずのお話を締めくりたいと思っていますが、やっぱりこういう話っていうのは私たちから見て距離がありますね、日本とフランス。報道なんかだったりするし、それを社会学的な分析といっても、やっぱり、まとめて外から考えてしまうというものがあるので、内側から、内側に入って理解をするっていうことも大事で。そのためには、例えば映画とか小説とか文学作品とかっていうのも一つの手がかりになるんじゃないかなと思うんですけども。

私、参考文献では挙げさせていただいたんですけども、『ヴェールを被ったアンティゴネー』っていうの、翻訳して出してるのがあって、それ、紹介したいと思うんですけども、アンティゴネーの話っていうのは皆さんお聞きになったこともあるかなと思いますけれども、これ自体が教養というカリベラルアーツの一つに考えていいんじゃないかなと思います。

古代ギリシャの神話がもとで、アンティゴネーよりもオイディプスのほうがよく知られてるんじゃないかなというふうにも思います。オイディプスは皆さんご承知のとおり、フロ

イトがエディプス・コンプレックスというふうなことを言ったので、これはオイディプス王がスフィンクスの問いに答えてるというようなことですが。オイディプスはそれと知らずに自分の母親と交わってしまうということがあるわけですね。だから、男の子は無意識のうちに自分の母親に対する性的な欲望があるんだ、それ抑圧してるんだ、そういう理論を唱えたことでフロイトによって有名になったっていうのがありますが。

実は、このアンティゴネーっていうのはオイディプスの娘なんですね。ライオスとイオカステ、つまり、ライオスというテーバイの王があるとき神託を受けて、おまえは自分の息子に殺されるだろうというわけですね。だから、妻とも交わらないようにしていたわけだけでも、あるとき酒に酔って交わった結果、男の子が生まれてしまったと。神託のことがあるので、オイディプスを山中に捨てて殺してこいって言うわけだけでも、赤ん坊だから殺すのに忍びなくてオイディプスは羊飼いに拾われて育てられるわけですね。そして、別の国の王子として育てられる。

オイディプスはオイディプスで、あるとき神託を受けて、おまえは自分の実の父親を殺しておまえの母親と交わるだろう、そういうふうな神託を聞かされますから、オイディプスはそのときは別の国の王子ですから、そんな、父の王と王妃、母親を見て、そんなこととても信じられないと思って。でも、自分の身を父親と母親から遠ざけるに越したことはないと思って旅に出るわけですね。旅に出たときに山の中で細い一本道でライオスとオイディプスが互いに父子というふうにならないうちに会って、細い道なので、おまえがどけとかっていう問答の中でオイディプスはライオスを殺してしまうわけですね。

そのまま旅を続けてテーバイに入って、イオカステ、王妃がいて、自分の母親と知らないでめとって、そこで子どもが生まれる。2人、エテオクレスとポリュネイケスってのが男、男で、アンティゴネー、イスメネ、姉、妹ですね。それで、このオイディプスは真実を知った後、目をつぶして流浪の旅に出るんですね。この真ん中がオイディプスですけど、そのとき、盲目のオイディプスの手を引いたのがアンティゴネーなわけですね。長女です。

オイディプスが出てった後、テーバイの国、オイディプスも亡くなるわけなんですけれども。2人の息子、エテオクレスとポリュネイケスっていうのが1年交代に、このテーバイの国を治めようというふうな約束、取り決めをするんですね。だけれども、1年たってもエテオクレスが譲らない。そうすると、ポリュネイケスは約束が違うっていうことでテーバイの町を攻めて戦います。兄弟で戦争します。それで、この2人が実は相打ちで死ぬんですね。相打ちで死んだ結果、このイオカステの弟なのかな、ここの兄弟姉妹にしてみればおじさんですよね、このクレオン、おじさんが王になるわけですね。

クレオンは王になったばかりだから張り切ってたってところもあるのかもしれませんが、国を守って死んだエテオクレスは丁寧に葬れと。だけれども、敵として攻めてきたポリュネイケスを埋葬することは許さんと。カラスか野鳥か知らんが死体をついばむままにさせておけというふうにお触れを出すんですね。この禁令に背いた者は死罪に処すということですね。

アンティゴネーにしてみれば、クレオンはおじさんですけども、2人とも自分の実の兄ですからポリュネイクスを葬るという決心をするんですね。それが、このアンティゴネーで、このポリュネイクスを埋葬するわけです。それをとがめられてクレオンと対決するということなんですけれども。実は、このアンティゴネーの話の中に幾つか対決の場面というのがあるわけなんですけど、まず、そもそも妹のイスメネはお兄さんを埋葬すると言うアンティゴネーを止めるんですね。そんなことやったら、おじさんであり王であるクレオンからひどいおとがめを受けるっていうことで、アンティゴネーを止めようとするイスメネもいるんですが、それを振り切ってアンティゴネーは埋葬する。

ただ、とりわけ、このアンティゴネーの戯曲の中の最大のクライマックスを成すのはクレオンとの対決ということになるかなと思います。おまえは私のお触れ、埋葬を禁じるというものを読まなかったのかと。そうすると、アンティゴネーは、もちろん読みました、読んだけれども、それはあなたが決めたことと。人間の法でしょうと。けれど、私は神々の法に従いますというようなことで、レジュメのほうには『5つの永久的葛藤』と書いておきましたけれども、このクレオンとアンティゴネーの対決には、男対女、中年というか年上、年長者と青年というか若い者、それから、社会の論理と個人の論理、生者の論理と死者の論理、人間と神々、こういう五つの永久の葛藤が詰まってるっていうふうに言うわけなんです。

このアンティゴネー自体はさまざまな変奏、アダプテーションの対象になってきたということで、いろんな人、ヘーゲルが論じたりとか、コクトーとか、アヌイとか、ブレヒトとか、そういう劇作家がアダプテーションしたりしてきたんですけど、その新しいバージョンで、この右側の方がフランソワ・オストっていう人なんですけど、訳書の原作者で、左が原書になりますが。もしも、このアンティゴネーが現代のヨーロッパ社会を生きるムスリム女性で、ヴェールをかぶってクレオンみたいな人に反対したらどうなるかっていう、アンティゴネーを下敷きにした劇を書いたんですね。もしよかったら、それを読んでいただけたらありがたいなというふうに思うんですが。

さっき言った、アンティゴネーのときの図は先ほどお見せしたのとちょっと違いますが同じようなものですね。これを、割と、人物相関図、もっと単純化した形になるんですけども、アイシャ、彼女がアンティゴネー役です。で、お父さんとお母さんがもう死んで、実は、このノルダンとハサンっていう2人の男兄弟、兄がいるんですけども、冒頭、1人がもう死んで、もう一人が重症っていうところで幕が開けるんですね。これ、実は、この2人が爆弾で吹っ飛んでノルダンっていうお兄さんが死んじゃって、ハサンっていう人が重体で病院にいるっていう設定なんですね。これ、みんな、学校に通ってる学生なんですけれども。校長がいて。この学校側は、ノルダンはテロリストだった、イスラームの過激派だった。ハサンはそれを止めようとしてた、いいムスリムだ。だから、ハサンは今から回復して私たちの下に戻ってくるのを祈ろうと。だけど、ノルダンはテロリストだから埋葬したり葬儀に出ちゃいけないっていうふうに言ったんですね。

けども、アイシャはお兄さんだから埋葬しようとして、それまでヴェールかぶってなか

ったんだけど、ヴェールをかぶって校長に反発する。そうすると校長は、学校ではヴェール禁止だというふうに言って、ここの2人の対決っていうのが非常に見ものになってるっていうことになります。そうすると、校長は、おまえは私の訓令を読まなかったのかと、ヴェールは禁じられてるだろうと。けども、私は兄に対する喪とか、自分の内面をよく表してくれるのが、このヴェールなので、これをかぶって、あなたの方針に抗議しますと。そういう対決が見られるわけなんですね。

その中のアイシャのせりふっていうのが、1カ所だけ引用しますが、かぶる女性の数だけのヴェールがあるのです。それぞれの人生、希望、恐怖、他の人とは取り替えられない歴史が刻まれているのです。だからヴェールの意味なんか校長先生は、父親とか兄とか近所のイナムとか、そういった人たちに無理無理おまえたちはかぶらせられてるんだろうっていうふうに言うかもしれないけど、全然そうじゃないんですっていうことを言っているところがあるんですね。

2人の議論っていうのは平行線をたどるんですけども、もう一つのレジメのところを書いてあるのが、ハイモンっていう人ですね。アンティゴネーの中ではハイモン、そして、『ヴェールを被ったアンティゴネー』の中のエリックっていう人なんですが、これ、実は、婚約者同士なんですね。エリックあるいはハイモンからすると、この2人の対決ってどう見えてるかっていうと、一方は父親、もう一方は婚約相手。だから、何とか、この2人の間を収めたいんですよ。そのハイモンあるいはエリックのせりふっていうのがレジメに書いてあるんですけども、父親であり王であるクレオンをいさめるときの言葉です。『ただ自分一人だけが、分別を弁えているとか、他人にはない弁舌とか気概を持つ、と思いこんでいるような人は、えてして蓋を開けて見ると空っぽであるものです』と。これは、だから、アンティゴネーを死罪にしようとしてるクレオンに思い直すように訴えかけているんですけども、それに果たして聞く耳を持つことができるかどうか。これが、きょうの話に引き付けて言えば、社会の中で力を持っている人が耳を傾けることで状況をひよっとしたら良くなるかもしれない、ところに触れてるんじゃないかなと思います。

これは、現代ヨーロッパが舞台のアダプテーションであり、その源泉は古代ギリシャですけども、現代日本でも、こういう似たシーンとかいうのはひよっとしたら皆さん考えることができるんじゃないかなと思いますけども、どうでしょうかということと、あと、『投げ掛けた問い』っていうところも書いておきましたが、ひとまず、時間は回ったようなので、また、質問を受けたりお答えしたり、あるいは、そのときにまた、どうでしょうかと。私も皆さんのご意見を聞きたいので、そこのほうに回したいと思います。どうもありがとうございました。

藤山: 伊達先生、ありがとうございました。それでは時間もないので、早速、ご意見であるとか質問をお聞きしたいんですけども、2、3人お話を聞いた後、トイレ休憩を5分ぐらい入れたいと思います。お二人の方から既に質問をもらっていて、それも入れていただいて結

構です。ぜひ、順番に手を挙げていただけないでしょうか。顔をアップしていただけるとありがたいと思います。

藤山：はい、城戸崎さん。

城戸崎：キャノンの城戸崎と申します。きょうはお話ありがとうございます。私、今、オフィスで使っているコピー機とかの開発をやっていて、その技術の中継を少しだけしております。

今回、質問のところ、投げさしてもらった内容なんですけれども、フランスっていうのは歴史的に宗教から自立して政治をやるために、ライシテっていうものを軸として共和国を目指してきた。その後、移民がどんどん増えてくる中で新たなイスラームとかの宗教とか文化に対して、スカーフ問題でいくと、公共の場に宗教を持ち込んでいいのかっていう議論がされながら、厳格なライシテの傾向になってきたのかなっていうのを本を読みながら感じてました。

これで考えたときに、近年の、このグローバル化で人の流れがどんどん進んで来たりとか、宗教の復興の中で新たな課題みたいなやつが生まれてきて、ライシテが、政教の分離から多文化の共生に向けて新たな定義とか考えっていうものやっつけていかなきゃいけないかなっていうところの議論が進んでるのかなっていうのをすごく感じました。これを考えたときに、フランスっていうのはライシテっていうナショナル・イデオロギーをすごく大事にして、共和国っていうことを守るために活発な議論が行われてるっていうのがすごく新鮮でした。

その反面、日本っていうのを考えると、戦前から戦後で日本国憲法が制定されて、憲法的には厳格なんだけど、運用では柔軟なライシテのように僕は感じてます。これ、一見、いまいちも見えないんですけど、ある意味、ライシテの信念っていうものは私も含めて国民レベルでは浸透が弱くて、ある意味、宗教が周辺化していて、まさに無関心になってるところがあるんじゃないかっていうのが実感してます。

この無関心っていうものがすごく気になっていて、問いでいくと、現状の日本で信仰に対して無関心っていうことは、結果として相手を認めないとか、多様性を受容できない、排他する方向に行く可能性があるんじゃないかなっていうのを感じていて。日本人が、これからの多様性とかいうことを考えたときに、この無関心を乗り越えて真のグローバル化とか多文化の共生を進めていくために、重要なポイントっていうのはどういうことがあるのかっていうことを先生のご意見をお聞きしたいなと思いました。

藤山：ありがとうございました。よろしくお願いします。

伊達：確かに政教分離っていうか、もともとは異なる宗教の信仰者であっても同じ社会のメンバーとしてやっつけていくっていうことが大事だと、それが共生の原理ですね。政教分離の

政治社会の中での理念、役立つものというんでしょうか。けども、今日だと、必ずしも宗教の信者ばかりじゃないと。さまざまな価値観を持って、そこには世俗も含まれる。だから、世俗も含めて、あるいは、宗教の教義を信じている信者だけってわけじゃなくって、宗教的多様性もですけど、文化的多様性とか、性的な多様性とかもあるかもしれません、そういったものを認めていくという形の多文化共生ですよ。それが一つ現代のライシテにとって期待される部分ってことがあるでしょう。

他方で、やっぱり、社会が大きく変化するときってというのは、クラッシュといいますか、自分たちの社会が壊れちゃうとか、自分たちの社会じゃなくなってしまうというふうに考えている人たちもいてですね。そうすると、フランスの理念、伝統ってというのはそういうものじゃない、私たちマジョリティーが培ってきたものだっていうようなことで排他的な方向にも行く。だから、同じライシテの名の下に、右っぽいナショナリズムと、あとは多文化共生とか多様性を認めようっていうほうと、両方がせめぎ合ってるってことなんだと思います。

ただ、フランスはライシテは憲法原理ですので、これを例えば破棄するとかってのはあり得ない、もう。と、基本的にはね。まず考えられないと思うんですが。日本だと何がそれになるのかってのが、キトザキさんのご質問でもあるけど、私の本の最後で読者に向かって・・・。

城戸崎：ああ、そうですね。

伊達：・・・聞いてみたいことなので、私も皆さんに聞いてみたいってところなんです。

ただ、思うのは、西洋の中で出てきた寛容と不寛容ってというのは、譲れない信念でぶつかって血みどろの争いもしたから、それを経ての、やっぱ寛容じゃないとお互いにやっていけないっていう、そこで違いを認めるってことなんだと思うんですけど。日本の寛容って、それを経た寛容じゃなくって、無関心、自分の迷惑じゃないうちはいいよと。だけど、ここのフィールドに入ってくると、それは困るからやめてねって感じの寛容。だから、同じ言葉でも違っちゃってるんじゃないか、それがとても一つ大きなところかなと思います。

あとは、そういった経験から、西洋だと政治哲学っていうんでしょうか。だから、共和主義であったり、冒頭で多文化主義とか間文化主義っていうのも軽くですけども紹介しました。あれは、自分たちの社会っていうのがどういう成り立ちをしてきたか、今、どういう課題と向き合ってるかっていうところから出てきた政治哲学だと思うんですね。

日本の場合、その政治哲学をどういうふうに、どこから私たちの歴史と考えると、どこから私たちの社会のメンバーだと考えて、共通のメンバーのための政治哲学と考えればいんでしょうか。その合意すらもちょっとうまく立てられてないんじゃないんですかね。ある人によっては日本の伝統というと、本当に平安時代とか言うかもしれないし、明治以降って言うかもしれないし、戦後って言うかもしれない。それ、やっぱり、日本、敗戦国ですか

ら戦後と戦前で切れてる部分と、でも、切れてるところをなかったことにしたいって考える人もいるし、その難しさが非常にあると思います。

あと、もう一つは、もちろん政府とか、そういう対策をするところで有識者と言われる人たちの登用して意見聞いたりしてるとは思いますけど、でも、政策に結び付けられてないんじゃないのかなって思うんですね、上手に。だから、多文化って、例えば病院とかで、それこそインドネシアとかからムスリムの看護師が来て研修をしてると。礼拝が必要だから礼拝室が必要だ。現場は対応してるとは思います。ていうか、そういうニュースは私も聞いたりですね。だけど、それを政治哲学とか政策に結び付けることはやってないと思ってるんですね。だから、現場が非常に対応してるところは対応してる。現場はいっぱいいっぱいだから、そんなのやってないとか、困るっていうところもあるかもしれません。でも、そこが非常にちぐはぐというか、有益的につながってないのが私から見てもどかしいし、多分、私なんかよりも社会的には皆さんのほうがいろいろ力があると思うので、変えていっていただけたらいいんじゃないかななんて思ったりするところです。

藤山: ありがとうございます。これ、共和国とカトリックの関係から始まったライセンスって概念みたいなことを言ってますけど、そもそも王権と教皇権の争いがあるわけですね。現実に対しては。

伊達: はい。

藤山: 日本でも、例えば仏教を国教にしたり、徳川家康が宗教を一つの法律の中に閉じ込めちゃった後に国学が出てきたりしてるっていうこともあると、いわゆる政治と宗教の問題っていうふうに単純に捉えた流れみたいなことで、個人の定義を厳格にした共和国っていう問題で無理やり日本に当てはめようとする、やっぱり難しいんじゃないですかね。ていう感じが私はしたんですが、いかがでしょうか。

伊達: まさにそうだと思います。キトザキさんのご質問にも戻るかと思うんですが、憲法では厳格に定めてるけど実際に柔軟っていうのは、やっぱり、個人としての信教の自由っていうのも、ぴんときてないってことなんだと思うんですね。あるいは、法律とか憲法とか学べば、そういうことかって思っても、実感とかとはうまくかみ合わないってことなのかもしれません。

藤山: はい。あと、梅原さんが、手、挙がってますね。よろしくお願ひします。

梅原: よろしくお願ひいたします。JST という研究開発を支援する国立行政法人におります、梅原と申します。よろしくお願ひします。

私、実は高校までカトリックの学校、私立のほうにおりまして、宗教の授業を受けていました。きょうのお話、宗教がテーマってということで、私の昔のことも実体験とも重ね合わせながらお伺いをして非常に興味深く伺っております。ちなみに駒場出身ですので同じ研究科なんで、おりましたし、ケベックともちょっとゆかりがあるので、すごく気になってました。

伊達： そうですか。

梅原： それはそれとして、多分、投げ掛けたい問いというところの一つ目の『日本はライシテの国か』っていう、城戸崎さんも触れられた、ちょっとそちらに絡むかなと思って、思い切って手を挙げてみたんですけども。

そもそも、素朴に、ライシテっていう、ライシテ感っていうんですかね、フランスの、いわゆる普通の市民の方っていうのは、それ、どうやって、いつ頃、身に付けるのかなって、本を、一応、読みはしたものの何となくちょっとかっちり落ちてないので、まず、そこを確かめたいことと、もしそれが例えば公教育みたいなので触れはするものの、やっぱり個人ごといろんな環境の中で、個人の中で築き上げられていくものであれば、多分それは文化というか、日本で言うところの、例えば、家族ってどういうものかとか、そういうレベルのものかなっていう結び付け方を、今、自分の中ではしてるんですが、全く今、自信ないです。

ただ、もし、そういう仮説って、家族間とか、あと、お互いに迷惑を掛けないようにしようとか、そういう道徳に近いものでライシテを捉えることができるのであれば、日本が共生の原理って言うのは恐らく一人一人の心の内にある考え方みたいなものであって、制度というものよりも個人の内の中にあるんじゃないのかなっていうのが私の感想なんですね。なので、その考え方がフランスと日本の教育制度との絡みから見たときに妥当というか、あり得る考え方なのかって、全く、今、まとまってないですけど、投げ掛けたいなと思って聞かせてみます。

伊達： フランスで、今、学校で、市民教育なんかの一環で、ライシテってものすごく強調されてると思うんですね。ただ、それは歴史の中では比較的新しいんじゃないかと思います。少なくとも2000年代以降。それは、ライシテが大事だっていうことと、ライシテが危機だっていうことが、ものすごくリンクしてると思います。なので、今の学校教育では、事あるごとにライシテって強調されて、そこで考え方を身に付けることになると思います。

例えば最近だと、12月9日っていうのがライシテの制定された日なので、ライシテ記念日に制定されました。これ、2011年です。でも、10年ぐらいあると伝統とか恒例行事とかになったりしますよね。このときに、合わせたりして植樹祭なんかを行うんですね。学校主体というよりは、でも学校に出入りなんかがある市民団体が主導をしたりするみたいですが、そこが植樹祭をするときにはライシテの木っていうの植えるんですが、子どもたちを

集めて、そこでライシテとは何かっていうのを教えたりしてるようです。私も現場そのものは見たことはないんですが。だから、そういった形で教育はされていると思うんですね。

やっぱり、なんでこれが最近、重視されてるかという、分断されている社会をどうにかしなきゃいけない、そのためには教育だっていうことなんだと思います。これは当然、やってる人は、これが効率的だから、これが大事だからっていうことで信念を持ってやってると思いますけども、むしろライシテの在り方に、相当、疑問を持って人たちからすると、だから逆効果とかって思ってる人もいるかもしれません。

フランスの、でも、教育ってというのは、日本だと知識教育と道徳教育って、あるいは知識教育と精神教育って分け方ができるかもしれませんが、教育って言葉自体が共通してますよね。だけどフランス語だと instruction と éducation っていう言葉があって分けたりするんですよね。instruction っていうのは知識の教育で、éducation っていうのが心とか精神にも関わるものだと。もともと、フランス革命があってコンドルセなんかは、学校がやるのは instruction だって言うわけですね。だから、フランスはフランスで、批判的な知識とか分析能力を養うのが学校であって、心の持ち方とかはむしろ自由だっていうのが割と普通の共和国モデルだと思うんですよ。

ただ、きょうの話であった Jule・Ferry、あの人は éducation モラル、モラルの教育が必要ってことで制度化するんですね。モラルがレリジョンのモラル、宗教のモラルからライシテのモラルに彼のときが変わった。だけど、フランスで、もう一つ 1968 年に若者たちの反乱での 5 月革命ってありましたよね。サルトルとかの時代ですけど。そうすると、サルトルとかの世代にとっては、モラルとかっていうのは古臭いブルジョアのイデオロギーであって、そんなの欺瞞だっていうことになるわけで。モラルなんかクソ食らえって思ってるわけですね。だから、やっぱ、68 年 5 月でモラルって学校教育からなくなるんです。だからもう、心の問題とか、それは好きにやればいいじゃないかと。ルールとか理性を行使する、それを、理性の使い方を学ばばいい。

だから、しばらくは instruction であって、モラルってなかったんですけど。éducation シビック、市民をつくるためにやっぱ教育って大事だっていうのは、その後また出てきて。それが今日のライシテ教育っていうことと合流してるっていうことなんだと思いますね。そのモラルが出てきたってことが右とか右傾化に見えるかどうかってのは見方によっても変わってくると思いますけれども。

藤山：ありがとうございます。

梅原：今のお話伺ってて、世代というんですか、教育があった頃と、その昔で、また違う。だから、フランスは一様ではないってこと、あらためて感じました。感想です。

藤山：ありがとうございました。5分ぐらい、今、手も挙がってないので休憩を取って、それからまた始めたいと思います。5分休憩にします。よろしくお願いします。9時ぐらいから始めます。

<休憩>

藤山：イスラムのどこなんですけども、あれ、スンニ派は確かにそういうのはないけど、シーア派はマシュワールドコムに、宗教学校で何世紀にもわたる判例の蓄積があって、アヤトラはトップでそれを全部決められるんですよね。だからシーア派は中央集権体制がかなりちゃんとしてるんですよね。スンニ派はないんですよね、確かにおっしゃるとおり。宗教権威のトップっていうのはね。面白いですよね。だから、イスラム国に対して説教できる人がいなかったって言いますね。シーア派はイスラム国にとっては敵だったし、スンニ派は権威がないっていうことで。

じゃあ、始めたいと思います。手が、お二人、挙がってます。宗教の問題っていうと非常に微妙な問題に関わるかもしれませんが、もちろん、この中での話は、この中だけの話でとどめるっていうことなので、なるべくお話、自分に即してやっていただける方がいたら、やっていただけたらいいかなと思います。山本さんからお願いしたいと思います。

山本：AGCの山本です。よろしくお願いいたします。

伊達：お願いします。

山本：私は4年ぐらい前にアメリカのシリコンバレーでスタートアップの技術をAGCに取り込むということをやってみて、帰国してからも、外とのオープンイノベーションをうまく活用して新規ビジネスを創出するっていう、そういう部署を受け持ってます。

今、教育の話、ウメハラさんのところでも出ましたが、私の家はある程度宗教に関わってこなかったっていうこともあって、宗教とは何ぞやっていうことすらほとんど知らないまま中学ぐらいまで過ごしてですね。そのときに、やっぱりテレビから流れてくるのは地下鉄サリン事件とか、そこら辺の売ってるつぼを100万円で買ったとか、そういう宗教の悪いところっていいですか、そういう部分のみが頭に植え付けられて、宗教って反社会的なものっていうか、良くないものなんじゃないかなっていうふうな感覚で育ってきたんですね。その後は、あんまり、そういうこともあって、そこに触れないようにして育て、城戸崎さんお話しされてたように。そういう状況でした。

一方で、アメリカのシリコンバレーに行ったときに先人から言われてたの、やっぱり文化の違いをちゃんと知らない、理解しないと、当たり前っていうものがそもそも違うのでビジネスうまくいかないよということで、宗教も文化の一つなんだよねっていうことで、積極

的に、今、アメリカのシリコンバレーの宗教ってのどんななのっていうのも知ろうということで、教会なんかも、子どもが学校の帰りとかに友達行くから一緒に行くとか言って、よく行きました。そこで見た宗教っていうのは自分が思ってたものとは全く違って、子どもが自然に入っていて、貧しい人たちにもちゃんと手を差し伸べて、みんなでちゃんとした大人になろうっていうか、そういうような、漠としてる感覚を受けました。

そういうふうにと考えると、アメリカのそういうところでは、うまく宗教を小さい頃から子どもに教えていくっていうか、そういうものをうまく活用して、ちゃんとした人間をつくるっていう方向になってるのかなっていうふうに感じました。

もう一回、日本に帰ってきてみると、うちの子ちょうど受験生になっていて、高校受験なんですけど、高校を見ていると、例えば、私、神奈川なんですけど有名な高校って聖光、栄光っていうのあるなんですけど、そこはいずれもカトリックの高校で。ここから全国でトップ校で東大に多くの人が入っていく。そういう人たちが政教分離とはいっても、政治家に多くの人になって、それで、やっていくっていう状況であることを知って、これ、本当にこういうシステムでいいのかな。

一方、僕がいた公立校は宗教とかなかったんですけど、いろいろ、このお話聞いて調べてみると、公立では、そういう宗教の教育、駄目ですよっていうことが日本では決まってる。

伊達：そうですね。

山本：なんで私立だけいいのかなっていうのもあってですね。このシステムがちょっと疑問に思いました。

それと、聖光、栄光、カトリックでやってるから成績いいんですかっていうところはどうか分らないんですけど、学校の理念みたいの読んでみると、必ずしも宗教にならなくてもいいんですけど、心のよりどころみたいな、毎日のお祈りとかそういうもので心のよりどころになると、そういうことが成績アップにつながってるんじゃないかっていうことが書かれていて。梅原さん、首かしげてますけど。多感な時期なんで、反抗期とかもあって、そういうものを、こういう、分かんないですけど、カトリックとかの教えで乗り越えて、みんなで一丸になっていい成績を取るっていう、そういう、宗教をある意味、活用した例の一つにもなるのかなと。

藤山さん、先ほどお話されてたような、日本ではそういう、昔から宗教を活用して人を一方向に向かせるとか、そういう事例も結構あると思うんですけど。なので、きょう、お話聞いたフランスのケースと、だいぶ違うんじゃないかなっていうふうに感じました。

質問としては、相変わらず何言ってるかよく分かんないんですけど、日本は多神教、やおよりの神で、グローバルな宗教を受け入れやすいとかそういう土台はあると思う一方、キトザキさんがおっしゃられてたような無関心っていうところも、逆にいっぱいあり過ぎてどうでもいいってことなのかもしれないんですけど、無関心っていうところもあって。そこ、

うまく政治的に取り込んで、より良い国にしていくっていうこともあるのかなっていうふうに思ってますね。そこら辺についてご意見いただけたらなと思いました。すみません。

伊達:ありがとうございます。非常に、お話、興味深いなと思います。現代日本で育てば、宗教って危ない、怪しい、別に要らないんじゃないの？って、非常によく分かる。もちろん大切にしてる人もいるから、あんまり公言しないほうがいい局面もあると思うけど、でも、普通にしてたら、そこら辺だし、分からない。分からないからこそ危険とかね。カルト対策教育とかはそれはそれで大事だと思うんですよね。ただ近寄らないってだけじゃなくて、何が本当に危ないとか、まずいのかっていう。

また、アメリカに行つての驚かれた反応。子どももつてお子さんですか。ヤマモトさんのお子さんも通つてたつてことですか。

山本:そうですね。学校自体ではそういうのはなかったんですけど、教会に結構、呼ばれて。英語分からなかったっていうのもあつて、英語を無料で教えてくれるとかつていうのもあつたんですね、教会で。そういうのとかも行かしていただいたりして、そういうところで、そういう精神っていうか、そういうのを学ばしていただいたっていうことですね。

伊達:私もアメリカは生活の経験自体はないですけども、でも、宗教状況とかは本読んだり、人から見聞きしたり何だかんだでなんとなくのイメージはあつて。だから、町内会というか、そこの中に入つていけば、そこが自然というか普通のことであつて。確かにヒューマニティーあふれるというか、貧しい人に手を差し伸べたりとか、そういうのを通じて、文化のコードを解読するにも、例えば、隣人とは誰かとか、良きサマリア人とか、その辺は定番としてあつたりするでしょうし。それはそれで子どもの教育なんかにも必要というか役に立つてるといふか、精神形成上、貴重なことでもあると思うんですね。

でも、逆に、日本で貧しい子どもつて、今、また増えてると思うんですけど、そういう人たちにどういふ手を差し伸べてる人たちがいるのかとか、その人たちを支えてる考え方は何なんだろうかつていふほうにも考えが行きますね。宗教がやつてるつていふところがあるかもしれないけど、宗教じゃないんなら何かとか、それを支えてる考え方つてのは何なんだろうとか、それはキリスト教文化圏とどう違ふんだらうかなんてことも考えますね。

あと、教育のところ、宗教系の学校がある、けども別に信者を育てるつもりはないといふか、あんまり関係なくしてる。それも非常に、ある種、日本的なんですよ。日本的つていふか近代といふか。だから、日本と、そこは、多分、韓国と比べると面白いと思うんですけど、韓国はクリスチャンとても多いですよ。人口の 30 パーセントとか 40 パーセントとか。

藤山：ですね。

伊達：だけど、日本は信者としてのクリスチャンは1パーセントの壁破ったことがないんですよ。戦国時代は2パーセントいたかもしれないみたいな話は聞いたことありますが、明治以降、解禁になって、1パーセントは突破してないわけで。それは、江戸のときの抑圧、キリシタン禁令の名残っていうのももちろんあるでしょうけれども、宣教師とかがやって来て、やっぱり教育に力入れるわけですよ。近代教育とキリスト教ってというのが日本においては結び付く面が多くて。そのときに、宣教師も最初は信者つくりたいと思ったかもしれないけど、それは難しいって分かったときに、信者を育てるんじゃないけどキリスト教精神にのっとった学校にすると。

新渡戸稲造とか読んでも、新渡戸自身クリスチャンでアメリカのクエーカー教徒ですけども、学校をつくる時なんかは、宗教は大事だけど別にそれは教派とか宗派の信者にするつもりはないっていうね。それが、だから、明治後期から大正期ぐらいです。やっぱ、その路線ってというのは確定してたってことが分かるかと思います。

日本の場合は、戦前は国家神道というかそういった形での神社参拝とか、時期とかによっては強制されたこともあったと思いますが。法制度的には政教分離、公教育に宗教を入れないってというのは、1899年の文科省の訓令の12号っていうから割と戦前からあったんですよ。ただ、政教分離ってのは、信教の自由を認めるっていうことでもありますから、私立だと宗教って科目があるのはそれはそれで理にかなったことというか。けども、その宗教的な精神があっても展開する側は、学生、生徒を信者にしますよなんて言っていると人が集まらないだろうから、だから、その辺は精神に即してやるけど別に信者であるかどうかは関係ありませんと。そういうことですね。

でも、日本では仏教は割と男子校で、女子教育なんかはキリスト教が、結構、力、入れたりとかいうところもあったりするんで、そういう目で見たりすると割と面白いことが見えてきたりするかなと思いますね。大学でも、私、前任校、上智ですけども、私自身は宗教を研究している、カトリックと思われたりするんですが、私はカトリックじゃないんですけども。そういう国家カトリックも、昔は神父さんが多くて。年々、少なくなったりもしてまですけど。

だけど、そういえば、上のほうに行くっていうか、経営側に、幹部になるような人は、宗教コードがかかっている大学と、かかってない大学があるとかないとか、そういううわさも聞いたりはしますけどね。

藤山：ありがとうございました。

今の話で思い出したのは、『余はいかにしてキリスト教徒となりしか』って、内村鑑三ですね。これは非常に深い本だと思うので、ちょっとお勧めかなって思います。日本人が宗教的でないってことはないんで、少なくとも江戸時代まではかなり宗教的だったと思うので。恐

らく日本人が宗教的でなくなった明治国家と終戦以降っていう、このことをよく考えてみるってことが、結構、大事なのかなって感じしますね。

星野さん、お願いしたいんですが、よろしいですか。

星野：はい。ENEOS 株式会社の星野と申します。私自身は研究者なんですけれども、10 年前にイギリスのロンドンに留学してたことがあって、研究室はいろんな国から人がいて、そのときに、あるときに、日本人ってどの宗教が一番メジャーなんだ？というか、どの信者が一番多いんだ？みたいなことを聞かれたことがあって、うまく答えられなかったっていう経験があります。今も、何て答えられるんだろうっていうのは、すいません、現時点でもちゃんとした回答がないっていうふうに思っています。回答ができないなって思ってます。

Slack の中では少し、公明党と創価学会みたいな話をしたんですけども、きょうの話と本筋とは違うのかなと思ったので、最初、キトザキさんの議論のところにあった、寛容についてお伺いしたいなと思っています。

寛容っていったときに、寛容って言葉だけであって、日本であったり、それ以外だと、ちょっと違うのかなっていう、同じ言葉だけど全然違うのかなっていうところは、まさにその通りかなというふうに思ってます。日本って、どちらかという個人思想に干渉しないというか、干渉することはタブーっていうふうに思われる、思ってるようなところがあるんじゃないかなって思っています。

一方で、フランスは、そういった個人の思想に対して干渉までは言わないですけども、そういったところを積極的に議論をしているんでしょうかっていうところで。もし、そうだとすると、なんで、そういう議論をせざるを得ない状況だったのかってところが背景にあって、そういった議論をするようになったのかっていうところと。逆に日本に戻ると、なんで議論しないんだろうと。議論しないでも何とかなるから議論しないのかなと。じゃあ、なんで議論しなくて済むんだろうって考えたときに、やっぱ、宗教、私は仏教ですとか、私はっていうのがしっかりとないまでも、共通の、言わなくても分かるっていうような共通の認識だったり、共通のルールだったりってところが、やっぱ、それが日本人には、ある程度、浸透していて、それも、ある意味、宗教なのかなっていうふうに思ったりもしてしまい。そうすると、無信教っていうよりは、むしろ、単一の宗教、みんな、持っているからそういうふうになり立つのかなっていうのを思ったりをしました。

すいません、質問っていうわけじゃないですけど、そのあたりについてご意見等お伺いできればと思っております。

伊達：忘れないように言うと、山本七平っていう、評論家っていうのかな。彼は日本教っていう言葉をつくったりしてますね。

藤山：そうですね。

伊達：今の星野さんのお話、いろいろと面白くて。でも、逆に、非常に実感がある中での問い掛けで、抽象的な部分もあって、具体的な経験からは聞くんだけど、ちょっと。だから、非常に難しいんだけど、でも、本質に触れてるところはあると思うんですね。だから、なるべく、私が理路整然に説明するのではなくて、むしろ、それを育てることが、私も部分的に引き受けながら考えるってことは、とても大事なんだと思うんですけど。

干渉するしないでいうと、日本だと、例えば、私だと、もしホシノさんと外国のラボとかで会って、研究者ですね、じゃあ、ホシノ先生とかって言って。けども、例えば飲みに行ったりしたときに、私が呼び捨てたり、さん、になったりして。でも、学会とかみたいなのところになると、またやっぱりホシノ先生とか言って。別に、そこ、呼び方変わってもいいと思うかもしれないんだけど。

多分、フランスとかだと、英語は、あなたは you だけど、フランス語は vous と tu なんです。ドイツ語とかでも敬称としての二人称と、親しみのある二人称があると思うんですが、vous って呼んでた人を、ちょっと距離のある人を一回 tu で呼んだら、もう tu です。もう vous に戻しません。それ、多分、vous に戻したら、ものすごくショック受けると思います。つまり、友達になったはずなのに、ものすごく距離を置かれたっていう。だから、それはコミュニケーションの中の役割とかで動くじゃなく、やっぱ一対一とか、その重なりっていうところがとてもあるんじゃないのかなと思うんですね。そこで、意見を交わしたことについては、もちろん、でも、それは tu とか vous の違いではないんだけど、例えば一対一とかでの交わした議論なんかでお互いに学んだことっていうのが、それが人間関係のベースっていうことがあるんじゃないかなと思うんですね。

やっぱり社会も、フランスもヨーロッパの大陸の中ではかなりいろんなところから人が集まってくるので、そういう意味でいうと多様性ってとても多いので。それと、やっぱり議論をして言葉で相手のことを知るっていうことがとても大きいと思うんですね。だから、説明して、あなたはなんでこうなの？とか、何が好きで何が嫌い、嫌いなのは、なんでこうなの？ 好きなら、なんで好きなの？とかっていうのは割とよくしゃべる。フランス人はおしゃべりってこともあって。でも、無駄な話だけじゃなくて、そういう、相手を知りたいからたくさんしゃべってるっていうところはあると思うんですね。

でも、日本だと割と暗黙の共通のルールがあるから、たくさんしゃべってれば、ただおしゃべりな人っていうふうに思われたりして、割と黙々と仕事してる人が社会的にも信頼できるような気がしたりして。それ、もちろん、悪いとこだけじゃなくて、いいとこたくさんあると思います。でも、多様化してったりとか、新しい社会になってくっというときに外から入ってきた人に、言葉で説明できないことは、ひよっとしたら見直したりとか、一回考えてもいいことなのかもしれないななんてことは思うというか。そうじゃないと受け入れられないというか、壁をつくっちゃって。言葉の壁っていうのはいつでも難しいと思うんで

すけども、それだけじゃなくって、なんか暗黙のルールっていうのを、でも、なんで、ここはこうなってるんですかっていうのを、これはこうだからだけじゃなくって言葉で説明できるのが、相手を説得するとか、違う人とも関わる、共通の話題をつくる、とても大事なことなんじゃないかなって聞いてて思いましたね。

他にもいろんな質問というか、ことがあったと思いますが、そっちの話をして、また、いいんですが。多分、それが一番大事なことだったような気がします。

藤山：宗教の問題を多様化の問題と皆さん感じられたっていうのは非常にいいことだと思うんですね。先ほど、先生がおっしゃられた山本七平、イザヤ・ベンダサンっていう名前で『日本人とユダヤ人』っていう本があつてですね。最初は覆面作家だったんですね。ユダヤ人っていうことで書いていたんですね。それで、われわれは、その時代にあつて、それは日本人が書いてたのかっていうのを後になって知らされるっていう、そういう人でした。われわれの時代のベストセラーだったですね。今、読み返しても、恐らく意味がある。山本七平の名前では『空気の研究』、そういう本を書いている人です。

では、吉田さん、お願いします。

吉田：東芝の吉田です。よろしくお願いします。貴重なお話ありがとうございました。私自身は研究所でマネージャーをやっているという、そういう立場で。普段はあんまり宗教とは縁のない生活をしていて、生活の中でもあんまり宗教の話題とか家族ともしないので、きょう、どういう講義になるのかなというのは期待半分、不安半分で聞いていたんですけど。

家族とも宗教の話ってあんまりしないんですけど、娘と、お父さんは何を信じてるの？みたいな話になったときに、僕は科学を信じてるんだよっていう話をしたのをちょっと思い出しまして。はっと、こう、自分は科学を宗教のように見ているのかなんていうことを思ったのを思い出しました。

今回、先生の本を読まさせていただいて、ライシテの話はフランスの話ということなんですけども、こういった話がグローバルな問題を解決する手段として活用できるモデルなのかっていうところは興味を持って聞いていたんですけども。例えば、地球環境問題のように、グローバルに、いろんな国々が同じ課題について議論しなきゃいけないときに、社会の共通原理とか共生の原理ってことを探し出すっていうプロセスが大事だってことかなっていうふうに思ったんですけども。地球環境問題みたいなものを議論するときに、データの役割とか科学の役割っていうの、一定の役割を果たしてるんだろうなっていうことを感じていて。それは宗教とは違う世俗的な価値観っていうか原理みたいなものになるのかなっていうことも感じました。

先生から見たときに、宗教から見たときの科学っていうふう映ってるのかなっていうのは、ぜひ先生のご意見を伺いたくて、質問に代えさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。

伊達：ありがとうございます。

藤山：非常にグッド・クエスチョンだと思います。よろしく申し上げます。

伊達：お子さんから、何を信じてるの？と聞かれたっていうのが面白いなと思いましたけれども。でも、その、信じてるっていうときには、科学で何でも解明できるという意味での信じてるなのか、科学の範囲はここで、それを超えるものもあるというのかで割と大きく違うと思う・・・。

吉田：私は後者の立場を取っているのです。そういう、一定、信じられるものがあって、それが自分の価値観のベースになってるんだよって、そういう意図かなと。

伊達：フランスの中でも、科学を絶対化するような主張をするような人もいれば、でも、科学の領域は科学の領域で、そこの中での世界観でやってくけども、孔子の言葉でいうと、鬼神語るべからずとか、そういうか、哲学的に言えばカントとかも、要するに理性の限界の中の宗教はあるけれども、それを超えるものもあって、でも、そこは知らないというか分からないという。だから、その範囲の中での経験主義的なものについては、私だってそれは、科学の信者というか、理性の言語で語れることというんですかね、そういうふうには思っています。ただ、それだけで全てが解決できるわけじゃなくって、その外側に人間の力が及ばないものがある、それを意識してるしてないは随分違うと思うんですね。そうじゃなければ非常に人間中心主義的になってしまったりするところがあると思いますし。

環境問題っていうときも、人間にとっての環境なのか、科学的な世界観だけにとつての環境なのかっていうと、もちろん現在の科学では人間が見てる世界と動物とか植物にとっての世界っていうのは違うとか、その豊かさとか多様性っていうことは意識して、それが科学的な研究とか環境問題のほうに取り入れられているっていうことはあると思いますけれども。どこかが中心とか、何かが大事で、他は見なくていいとかってやると、いろいろ問題が生じるのかなんてことを思ったりはしますね。

ちょっと感想めいたことになるかもしれませんが、地球環境問題というと、きょうみたいに暑い日だって環境のことを考えないわけにはいかないわけですけど。日本も取り組みはいろいろあるんだと思いますし、皆さんの中でもそういうことやってらっしゃる方もいるかもしれませんが、フランスは割と、環境、地球、これ、相当に何とかしないとイケないって問題意識は、ある意味、日本の世論、一般の感覚より、今、強いんじゃないですかね。人智学とかアントロポゾフィーっていうって、要するに地球の環境の中に人間が果たしてきた役割、人智学っていうのは近代以降、18世紀後半とか20世紀後半以降の加速の時代とか言ったり、いや、新石器時代から人間は、結構、環境、傷めてきたとか何とかっていうふうにあったりしますが。要するに、環境っていうのは人間を生かすだけじゃなくって人間の

ほうが環境破壊してきたっていうふうな、今、自覚に立たなきゃいけないっていうのは、割とフランスで人気を集めてる議論で。

そのときに、日本が、これ、フランス人の幻想も入ってる日本像だと思いますが、自然との調和、知ってるように見える部分ってあると思うんですね。それは半分本当だと思うんですが、でも、割と日本でも、環境あんま環境なくとか、次の世代のこと本当に考えてこういう人たち政策とかしてるのかなって、こっちが疑問に思ったりするようなこともあったりするんです。そういった日本の、国際的にもいいイメージだけを搾取するんじゃなくて、それに見合ったこともちゃんとやってくる必要があるんじゃないかななんて思ったりします。

藤山: なかなかいい質疑応答だったと思います。私もちょっとしゃべりたくなっただけです。ヨシダさんのお嬢さんは幾つなんですか。

吉田: 今は高校2年生ですけども、そういう話、したのは小学校の低学年ぐらいのときだった、古い話ですけどね。

藤山: でも、何を信じているの？って娘から聞かれるっていうのは、大変、素晴らしいことですよね。

吉田: なんかびっくりした。

藤山: 私は実は文科系で、今、科学技術振興機構にいるんですが、よく科学技術振興機構の人に、ちょっと僕がおちょくって言うのは、振興っていうのはもちろん奮い立たせるほうの振興なんですけど、あなたのはどっちかっていうと宗教のほうの信仰、科学を宗教のように信仰している感じだよって、よく私は言って、議論を巻いてしまうことがあるんですけども。実際に、科学者の中にはそういう感じで科学を捉えてる人ってのいると思うんですね。そうすると、人間中心主義ではなくて、人間が決められるんじゃなくて、ノア・ハラリじゃないけど人工知能に決めてもらえるのであれば自分は決めなくて済むから楽であるというような感じになってくると、信仰の意味っていうのがどこまでなのかなっていう問題が出てくると思いますね。

今、伊達先生からカントが出てきたんですけど、カントっていうのは確か、生まれ、一応プロテスタントってことになってるんですが、彼の著作の中には神は出てこないんですよね。慎重に避けてるのかもしれないし、避けてるんだと思うんですけど、『純粋理性批判』では神は存在の証明の対象ではないって書いてるんですね。それは、デカルトが、神様がいるっていうことを証明するっていう例の『方法序説』でやってることに対する批判だと思うんですけど、『純粋理性批判』のほうでは確かカントは、神は存在の証明の対象でないばかりではなくって批判となるのは道徳であるっていうところまで発言をしてるんですね。だから、

実際には、神を排除して物事を考えようとしていたんだと思うんですね。哲学の中でも、デカルトは科学者の神様だって、科学者の起源だっていわれてるんですけど、神の存在証明をしてる、神のいる合理主義者だったんですけど、18世紀になると、もう違ってくるということがあると思います。ちょっと余計なおしゃべりでした。

それでは齋藤さん、お願いします。

齋藤：よろしく申し上げます。日産自動車の齋藤といいます。

伊達：お願いします。

齋藤：私自身は技術開発部門で、幾つか海外、中国とか南米だとかに赴任して現地のチームを率いたこともあります。ご存じのとおり、日産なんで毎日フランス人の同僚と、私自身、アライアンス・グローバル・ダイレクターっていう肩書なんですけども、一応、部下を持っていて、バーチャルに、毎日けんけんがくがくにやっています。

私自身、宗と教の関わり、一般的な日本人の像にかなり近いんじゃないかと思えますけども、一応、家の宗教は確かに仏教で浄土宗なんですけども、結婚式は教会で挙げて、家内はカトリック系の学校に通っていたりとかですね。息子たちを、もう高校生になりましたけど、幼稚園を探してたときには、家の割と近所に真言宗系の仏教系の幼稚園があって、いろいろその住職とお話ししてくると、ある意味、畏敬の念っていうのをなかなか示すのが難しい中で、こういうところで幼少期を過ごすのはいいんじゃないかと、で、そういうところに入れたりですね。という意味で、都合よくいろんな意味で宗教をつまみ食いしていると、そんなようなくらいです。

きょう、私も本当にいろいろ考えさせられるなと思って。伊達先生の本の最後に問い掛けられていた、日本語としてライシテに変わる言葉としてどんなものがあるのかというのを突き付けられたときに、果たして、とか、日本人がちゃんと思想を持って、それをこだわって本音や思想を戦わせるような場面はあるのかっていうのを問われたときに、うーん、と思いました。

一方で、われわれ、グローバル・エンタープライズの中で、実は、非常にあるところでは柔軟にだったりだとか、あるところでは戦略的にだったりだとか、あるところでは本当に腹を割り合って、かなり多く、そのところまで突き詰めた議論をし合って、物事を、ある企業活動の中なんですけど、進めているっていうことはしてるなど。キーワードで、多文化の共生のようなことが出ていましたけども、これを、一日本人として、何か私自身が今まで意識をして取り組めてきたかなという、非常に反省をして思うところいっぱいあるんですけど、ただ一方で、いろんな企業活動の中では確かに、いろんな理念にのっって正しい方向を信じて向かっていっているっていうことは、いろんなとこで行われてるんだろうなと思いました。

質問というか、そういう意味で、いろんな社会自体の仕組みだとか、いろんなものが動いて変化してきている中で、しかも地球規模でいろんなものがまさに交ざり合っていく、しかも、SNS だとかいろんなテクノロジーを使うと一瞬にしてそれがつながり合っていくような中で、宗教が本当にあらためてどういう意味を持つのかなと、どういう役割が担えるのかなという話だとか、その上でのライセンス的な観点ですね。いい意味での、開かれたライセンスという意味で、いろんな宗教に対して分け隔てなくというか、自由であると、開かれているということを確認していくようなことがいろんな意味でやっぱり、多文化を受け入れて、まさに共生していくといううえでは重要なんだろうなというふうには思いました。なので、この現代においてどのように先生お考えかっているのを伺ってみたいと思いました。

伊達: ありがとうございます。前半の話も非常に面白くて。もちろん、企業の中ではルーティン化した部分というか、効率を追求しなきゃいけない部分っていうの当然あると思いますが、やっぱりポイントで相手と腹を割ってっていうときがあるんだっていうことを思わされるような内容だったと思うので。柔軟にとか、戦略的にという、その局面においては、やっぱり本当にマニュアルどおりじゃいけないというか、考えとか思想とかが試される場なんだろうななんてことを聞いていて思ったりしました。

だから、企業理念っていうのも大事で、企業理念っていうのはどうやってつくられて、どこから来てるんだって考えると、そこには歴史とかがあって、宗教とか世俗とか言わなくてもいろいろ交ざってるものが実際にはあるんじゃないかななんて思ったりしますね。それと宗教の意味、役割っていうのはつながる部分があるだろうとは思っています。

この課題図書の中では、ライセンスといっても実は非常に多様なんだよという話だったわけですが。宗教も本当にいろんな顔をしていて。割と皆さん、私もそこはかなり同意すると思うか、私も宗教的な背景がそんなにある人間ではもともとは無いと思うので、怪しい宗教、片仮名で書かれる、危ないとか、そういう宗教も当然あるけど、可能性も見だしたいところはあって。貧しい人に手を差し伸べるとか、そのアメリカの教会でって話がありましたよね、だから、そういう。あとは、きょうの話の中で、日本とフランスとか他の社会っていうときに、日本の世間のいい面も当然あるかもしれないけど、そこ突破するとか、それが良くないしがらみ、良くない出方をするときもあるので、良くないしがらみを乗り越えたり相対化するとき、宗教の見方って案外大事だと思ったりするんですね。

要するに、もちろん周りと調和してというか、別に迷惑ももちろん掛けたくて掛けるわけじゃないけども、ここぞというときに、迷惑掛けるな、だからおまえは黙ってろって言われて、はい、そうですかで済むかっていうときに、いや、ここが、もちろん迷惑掛けるつもりはもともとは無いけど、やっぱここだっていうときに自分を支えるものが世間のしきたりだけじゃないっていうのに、私は、宗教が大事なことがあるかもしれないし、あとは、国家とかナショナリズムとかも悪いばかりじゃないと思うんだけど変な出方をするとき、そこを超えてくグローバルな力っていうの、宗教、持ってる面はあるので、そこかなと思う

んですね。

そういう役割は、実は、ライシテの論理と真っ向からぶつかって相いれないだけじゃなくって、ライシテのほうも形骸化したものは絶対化する、さっきも科学の絶対化と、要するに、1を見つけた科学と、それ自体を絶対化してしまうとゆがんでしまうというのもある。だから、どちらかというと、科学にしる、ナショナリズムにしる、ライシテにしる、ゆがむと、硬直化するとまずいんだけど、宗教もそういう面はあって、そこに可能性っていうのを見いだせるんじゃないかなと思うんですね。文脈の中でやっぱり捉えるってことが大事かなと思います。宗教はこう、世俗はこう、科学はこう、ではなくって。

藤山：ありがとうございます。先生にご質問したかったのは、フランスは、宗教を何を信仰してるのかっていうのは統計とか採らない国ですよ、確か。

伊達：そうです。国勢調査で宗教を聞かないんです。

藤山：聞かないんですよ。

伊達：はい。

藤山：でも、大体どのくらいいるんですかね。ムスリムの。

伊達：民間の調査会社とかがありますけど。でも、それが、だから、要するにカトリックって何パーセントかっていうときに、そのカトリックの内容が変わるので。

藤山：ああ。

伊達：今、だから6、7割って言われると思うんですが、その6、7割ってというのが、毎週、教会に行きますっていうと5パーセントぐらいまで落ちるし。

藤山：そうらしいですね。エマニュエル・トッドが書いてましたね。どこの地域に何パーセント以上、教会に行くっていう統計。じゃあ、ムスリムはどのくらいいるんですかね。

伊達：ムスリムも、これは、また面白くてですね。面白くてですねというか、これ、学生の前で授業でやったことあるんですが。要するに、フランスにムスリム何万人いるか。50～60万人、100万人、200～300万人、500～600万人、1000万人、2000万人とか書くんですよ。で、手、挙げさせるんですが、大体のどこに落ち着くんですけど。一般にメディアで500～600万人って言われるんですが、でも、それ、どういうふうに計算してるかっていうことが

あるわけで。

例えば、さっきのルペン支持してた人たちじゃないけど、極右の言説とか、政治家の中でもフランスにムスリムが 2000 万人近くいるみたいなこと言った人いるんですよ。3 分の 1 ぐらい。それはなぜかという、実際じゃなくて、権威のあるジャーナリズムが、あなたはフランスにムスリムが何パーセントぐらいいると思いますかっていう質問を集めて、それが頭の中で何パーセントいると思っちゃって、それ、発言をしてしまったっていうケースもあるんですね。

だから、ある地区によっては非常に多いし、フランスがムスリムが非常に多くなるって危機感を持ってた人たちが高く思ったり、言ったりするってことがあります。でも、実はイスラームの指導者の中にもフランスでイスラームの存在感を大事だよっていうことを言うために普通に言われてるのよりも多い数字で言う人もいます。それも、だから、言説の中では変わるでしょう？

大体、移民の数とか、その子孫とかで考えるとどのくらいになるかっていうことになるわけだけでも、でも、フランスでは、移民の 2 世とか 3 世っていうのがカテゴリーとしてオフィシャルじゃないんですよ。だって、フランス生まれでフランス市民になるので。

藤山：そうですね。

伊達：そうすると、父親、母親が移民で入ってきてムスリムだなんていう予想されるけど、子どももムスリムだなんて予想されるんだけど、それは公式の数字からは上がってこないものなので大体の計算になるんですよ。500~600 万人が大体かなって言われたりするんだけど、でも、その中でモスクに通ってる人は実際にどのくらいいるんだとかっていうところまで調査していくと、どんどん数が減ってきますよね。

藤山：そうですね。

伊達：カトリックが教会通いする人も多くないように、ムスリムも毎週熱心にモスクに通ってるって人はムスリムとされる人よりは少ないわけなので。

藤山：信仰を国勢調査で書かせないっていうのは、国側からいうとどういう論理なんですか。プライバシーを保護するってことなんですか。それとも、その・・・。

伊達：フランス市民であることに。

藤山：変わりがないから関係ないと。

伊達：そうです。最後に実施された国勢調査、1870年代だったか80年代だったか。

藤山：えっ？ 1800ですか。

伊達：1800です。

藤山：すごいな。という、今の先生のお話でお分かりだと思うんですけど、今、フランスで出生率の回復があって、これは政策が効果を上げたんだって言うんだけど、そうじゃない人は、これ、移民の子どもが増えただけだって言うんだけど。移民の子どももかどうかっていうことの統計が取れないんで、この議論は正解がないと、こういうふうに言われたことがあって、それはちょっと面白い国だなんていうふうに思ったことがあります。フランス人ってということでちゃんと登録されるんで、2世、3世とかになったときの出生率対策の効果っていうのが、単に移民が増えたからなのか、政策効果が本当に上がったのかっていうのがよく分からないという話もありました。

あとお二方、お話をしていない方いらっしゃると思うんですけど、いかがでしょうか。佐藤さん、お願いします。

佐藤：大変貴重なお話ありがとうございました。文部科学省の高等教育局で大学のほう担当しています、佐藤と申します。よろしくをお願いします。

きょう、どちらかという2番目のポイントなのかもしれないんですけども、宗教っていうのが本当に現代的な価値観から考えると厄介な存在なんじゃないかなっていうことを非常に感じます。宗教っていうこと定義付けるって、多分、すごく難しいと思うんですけども、宗教っていう名の観念とか価値観を規範化する集合化したものみたいな印象持ってるんですけども。そういうものって結構、道徳教育みたいなところにもすごく深いところで、多分、反映していると思うんですね。なので、ライシテといって宗教分離っていうのやって、国家の宗教的な中立性っていうの守ろうとはするわけですけど、保とうとはするわけですけど、結果的に、国家による教育のところ、かなり深く出てくる部分っていうのがあるんじゃないかなと思っていて。

きょう、お話を見てて、すごく関心を持って見たのが、間文化主義と多文化主義っていうスライドだったんですけども。多分、日本っていうのが、これからのグローバルみたいな時代の中で、かなり実は知らないところでも混血化が進んでいたり、あと、世代間でも若者たちの価値観っていうのが、無宗教っていうのも、ある意味もしかしたら一つの宗教かもしれないなくて、価値観とか観念の集合体って意味では。そういうものを考えると、まさに、実は、いろんなジェネレーションとか、国的な、国籍的な、背景的な間文化主義っていう方向に、多分、日本っていう国はこれからどんどん加速化していきだろうなと思うんですね。

先生のスライドにあった、間文化主義における社会の共通原理っていうのあるってお話

があったんですけど、社会の共通原理って何だっていうと、その、多分、コアになるのは憲法でも保障されてる個人の尊重っていう話ではないかなと思うんですけど。それって、すごいコア過ぎて当たり前過ぎて。それ以外に間文化主義における社会の共通原理って何だっていうの考えると、僕はやっぱり道徳的なところなんじゃないかなと思っていて。それが一番最初に申し上げたように、実は宗教的なところからすごく大きな影響を受けていくっていう意味では、非常に宗教っていうのが今後、特に現代、グローバル化社会だからこそ、それが加速化していくからこそ、その中における個人の尊厳以外の道徳的な観念、宗教的な観念も含めてっていうことになるのかもしれませんが、観念とか、そういったものが今後どうあるべきなのかっていうのが、すごく大きな課題になってくのではないかなっていうのを考えさせられました、という、すいません、質問というか意見みたいになってしまうんですけど。まさにそういった社会の共通原理の考え方をどういうふうに関後考えていくべきなのかっていう捉え方をですね、ていうのは、特に行政側にいるので考えるところがあるのかもしれませんが、すごく今後、悩ましいなというところを思います。以上です。

藤山：ありがとうございます。この間文化主義っていうの、このケベックの話は、『フランス語をもとに』って書いてありますね。

伊達：そうですね。これ、だからナショナリズムってことも関係するんですけども。ありがとうございます。これ、今、サトウさんは、間文化主義での原理って個人の尊厳で、ある種、当たり前過ぎるっておっしゃって。でも、私は逆に問い返したいんですが、当たり前過ぎますでしょうかというか。だから、西洋で言われてる個人の尊厳と、日本での個人の尊厳っていうのは、さっきの寛容の話じゃないけどちょっと違ってこないかっての思う部分があるんですね。

つまり、日本にもいろんな個人の考え方があってと思いますが、例えば今の政権を取ってる政党なんか考えてる改憲案では、個人じゃなくて人に変えたがってるっていうところがある。それは、天賦人権的な個人ではない、だから個人の尊厳を、それを突き詰めてくと、ないほうに行っちゃうんじゃないかって懸念もある。だから、実際には、この西洋由来の部分もあるかもしれないけど、でも、多分、普遍的なものもある個人の尊厳っていうのを日本の社会に本当に根付いてるんだろうかっていう部分もあると思うんですね。だから、あまりに当たり前過ぎることでもないかなと。

あるいは、むしろ間文化主義的な方向に日本が行くというか、こういうのを目指すところあるだろうけど、でも、これって多分、国際化とか、多分 80 年代ぐらいから言ってることも割とこんな感じの、きれいに言うと、こんなことは、やってきたんじゃないかなと思うんですね。本気で考えるときに、やっぱり個人の尊厳っていうところは戻ってくるころかなとは思うんですね。

他方、これはケベックの中でも、個人の尊厳自体で、個人、個人で社会にエンゲージメントしない個人は困るっていう感覚はやっぱりあるわけで。これはケベックの独特の文脈っていうのがあって、今、藤山座長がご指摘くださったように、フランス語ってのが、これ、ケベックの文脈で、ケベックは英語の海に、ある種、浮かんでる島のようなものってことがあって。北米にあって、周り、英語なんですよね。地続きで。自分たちの文化って何だろう。昔はカトリックとフランス語が結び付いてて、カトリックは今それほどでもないですが、フランス語っていうところにアイデンティティーを求めることによって私たちの社会を支えるっていう面が強いですね。だから、ケベックの中には右のナショナリストもいるし左のナショナリストもいるけど、基本的にはみんなナショナリストと言えると思うんです。

日本の場合、多分、ナショナリストっていったら右で、左の人はあんまりナショナリストって言わないですよ。そこで、この左の人というか、社会の何をもって成り立たせてるか、共通文化って何かっていうのの文脈が一つ違うんだと思うんですが。ケベックの場合は、フランス語で支えないと英語に飲まれるかもしれないという危機意識が、右の人も左の人も、ある種これを共通文化としてやってく必要があるんじゃないかという意識につながってると思うんですね。

だから、日本でそのまま使えるわけじゃないけど、ちょっと比較的な話、日本の文脈は何なんだと、そのうえでこれを生かすにはどう考えればいいのかっていうところかなと思っていて。私だけでは、考え、まとまる話ではないですし、実際にやろうと思ったらいろんな方の協力が必要だと思いますけれども、サトウさん、文科省におられるということで、ぜひそういうの、より良い社会のために動いてくださったらいいななんて思ったりします。

藤山：ありがとうございます。これ、間文化主義ってのは、要は、その中に規範を求めていこうってことになる、例えば、今のグローバリズムって言ってた、市場原理と民主主義と科学技術が規範なんだって言って推し進めていったけども、今、その三つが規範で地球上がそのまま通るの？と。中国なんかは公にそれを反論してるよねっていう時代を迎えてるっていうことですよ。そういう時代の中で、今からそれをどういうふうに考えるのかっていうのは、いろんな目配りが必要だっていうことになるのかなという感じがします。

伊達：経済至上主義っていうのかな、それは強いと思います。

佐藤：もう一点だけ、すいません、それ、宗教が絡んでくると本当に厄介だなんて最初に申し上げたのは、4、5年ほど前、アメリカ行ったときにシリアからの移民の人が、9.11の例のワールドトレードセンターの話になったんですけども、彼が、すごく、あれはアメ

リカ政府によるフェイクだっていう、要は自作自演だっていう話をしている。いや、そんなのないよね、みたいな話、してたら、実は、まさにあれって、でも、日本のカミカゼと同じ精神だよって話をされたときに、すごく、あつて気付かされたっていうか。

だから、今の彼らの宗教的な考え方と、多分、戦時の日本人の、それは宗教というか、また精神論になるのかもしれませんが、そういう考え方ってというのが、いろいろ、間文化になるところ、文化一つ一つに宗教が絡んでくると入ってくるので。そういう中で、本当に、社会の共通原理っていうののどうやってつくるんだってというのは、相当、多難だなんていう気はしました。

伊達：はい。

藤山：はい、ありがとうございます。

では佐倉さん、お願いします。

佐倉：三井住友銀行の佐倉と申します。本日はありがとうございます。私自身、会社では経営企画部ってところに所属しております、いろいろ金融周りの調査をして経営陣に報告をするような仕事しております。

宗教に関しましては、今まで出てきたお話と同じように、あんまり小さい頃から全く意識をしないで生きてきたタイプの間でございまして。仕事上でもそういう意味であまり関わってこないということで、なかなかきょうのお話も大変興味深く伺いする一方で、自分のことに落とすのが結構、難しいなというような思いもあって聞いておりました。

私自身もロンドンとニューヨークに勤務はしてはいたんですけども、特にロンドンなんかは非常に宗教的には、町としてはっていうんでしょうか、多様というんでしょうか、イスラム教徒のかたがたもたくさんいましたし、当然キリスト教徒の方もたくさんいましたし、非常に多様な、共生してるようなイメージは持っていたんですけども。やっぱりオフィスの中では政治の話とか宗教の話ってというのは基本的にあまりするべきではないというふうな感じだったので、あんまり宗教に関して現地の方と議論するっていう機会がそんなに多くはなかったというのが現実です。

私自身、ただ、その少ない中でも、先ほどヤマモトさんでしたか、お話があったと思うんですけども、やはり、何か聞かれたときに、どうしても、自分の宗教観って何なのって言われたときに答えにくいっていうのはずっとあって。何だろうかなってすごい思うんですけども、やはり、これも途中でお話のあったとおり、日本って何となく皆さん共通理解みたいなものがある中で、無意識の中での単一の宗教みたいなものもあるのかなと思いつつ、それが十分に言語化っていうんでしょうか、言葉にできないっていうようなことなのかなと思っておりました。

ただ、それでいいのかっていうと、きっと、今、日本って非常にまだ移民の少ない状況なので、それでやっていけるのかなと思うんですけども、今後、移民増えてくると、例えばロンドンようになってきたときに、本当に、このままでうまくやっていけるのかっていうのは、やや心もとないというか、大丈夫なのかなっていうのは自分の中で思ったこととございます。

なかなか質問っていうのは難しいんですけども。そういうように私みたいな、なかなか日本人の宗教観って何なのっていうのを言葉にできない人が多い日本人なんですが、これって他の国の人から見ると、日本人って実際どういうふうに宗教的な面、見られてるのかなっていうのちょっと関心がありまして。例えばフランスの方々って日本人をどういうふうに見てるのか。例えば、単純に仏教の国だと思われてるのか、例えば、天皇の国だと思われているのか、そこら辺の、何かフランスにいらっしゃった経験でお伺いできればなと思っております。よろしくお願ひします。

伊達：どうお答えしたらいいか。日本人の宗教は何かって言われて、それこそ、日本人の道徳の出どころはどこかって西洋人から聞かれて武士道ですって本、書いたのが新渡戸稲造ですよ。あれは、でも、新渡戸稲造自身がキリスト教徒だったということもあるかもしれないし、あるいは、西洋人の目から見た、西洋人に通じる論理としての武士道を英語で書いたっていう面もあって。だから、外から見て自分たちはこうだっていうふうに説明を試みるっていうことが一つ大事だとは思んですけども。

でも、外から見ないで内側から、その論理で引き出してくることができるかなってことは本当は常々考えてみてもいいとかあるいは、そういう作業を通して私たちの伝統とか社会の基盤とか何だろうって考えるとき、本当はそういう作業って欠かせないんだと思うんだけど、日本だと、それこそ内田樹さんの『日本辺境論』っていうのあるけど、その『日本辺境論』自体も、いろんな先人たちの思考も流れの中にあるわけですが。ある種、文明の辺境にあったから外から取り入れてきたっていうところがあるわけですよ。だけど、その中で築いてきたものっていうのが何だろうかって作業は本当は欠かせないんだと思います。

移民はまだ少ないとおっしゃいましたが、実際には多い部分もあって。でも、いずれにしてもこのままでは多分いけないだろうっていうことはそのとおりで。そのために、だから、さまざまな、それこそ社会で行われてることはどうなのかとか、私たちの社会の共通の基盤は何なのかとか本当に考えて、政策のほうに向けてったりすることって急務だと思うんですけども。本当に急務という形でどのぐらい意識が共有されてるのかとか、動いてる人がどのぐらいいるかっていうと、なかなかそうじゃない部分もあったりして、そこは本当に難しい問題だなと思います。

フランス人が日本をどう見てるか、日本人どう見てるかって、それはいろいろで。日本人の宗教、何？って、本当に何にも考えてないように、あっけらかんと聞いてくる人もい

るし、でも、変に知ってても面倒くさい、面倒くさいって言っちゃ失礼だけど、ややこしいです。でも、日本に対するエキゾチシズムとかオリエンタリズムとか、ある種のポジティブなイメージ持ってる人は、ある世代までは多い気もしますけれどもね。若者は若者でマンガ文化とかっていうのに非常に興味があつて。あんまり宗教とか、そんなに興味ないんじゃないかなって思ったりもするし。

ただ、プレゼンスはひょっとしたら下がってるかもしれないっていうのはありますよね。だから、私が留学してた頃だと、日本は文化の国ってプレゼンされてた気がしますけれどもね、既に。でも、多分、バブルの頃だと、日本は経済の国っていう印象がものすごく強かったんじゃないですか？ ただ、2000年代でも、経済だと中国に抜かれかけてたようなところがあるので、要するに日本は文化、中国は経済っていう形でメディアなんかでも語られるようなことが多かった気がしますし、今でもそうなのか、日本のプレゼンス、もっと落ちてるかって感じはすると思うんですよね。

藤山：ありがとうございます。もう時間なくなりましたが、オブザーバーの方でどうしてもご発言したい、聞いてみたいことがあるっていうようなことがいらっしゃいましたら、お一人いかがでしょうか。特に、手、挙がってないですね。よろしゅうございませうか。他に、あと1人ぐらいで。

きょう、私、話し過ぎたかもしれないけど、ここに私の画面見ていただくと、こっち、白隠なんですね。白隠の『金棒』が描いてあつて。『此のわろを恐るるものは極楽へ』って書いてあるんですね。『此のわろ』っていうのは、この物、これ、鬼に金棒の金棒なんですけど、鬼に金棒の金棒を恐るる者は要するに自分の身を律してちゃんと極楽に行けますよと、悪いことをしちゃいけませんよっていうね。こちらは、ルオー『ミセレーレ』なんなんですけど、きょう、宗教のお時間なんで、二つ出して掛けて。

伊達：普段からこうだというのではなくて、わざわざ出してこられたんですね。

藤山：こちらは出してきました。

それでは、もし、なければ。きょうは伊達先生、大変いろいろありがとうございました。

伊達：いえいえ、ありがとうございました。

藤山：遅くまで、しかも、目線に立ってお話をして。やっぱり今までの回に比べると、宗教の題材になると、この、今の皆さまの世代の人たちの突っ込みっていうのは今一つ甘いのかなっていう感じは、私は正直しました。民主主義や科学技術や、市場原理のところでの切れ味っていうのよりは、どういう質問をしたらいいんだろうっていうふうに考えてる

なっている印象が非常に残ったのが、またある意味では新鮮でした。きょうは本当、伊達先生、大変ありがとうございました。勉強になりました。

伊達：ありがとうございました。

藤山：今回はこれで終わりにしたいと思います。次回は9月2日、水曜日です。竹村先生にお願いしたいと思います。では皆さん、よろしく願いいたします。伊達先生、ありがとうございました。

伊達：どうもありがとうございました。

(了)